

205069-000-3

特64-567

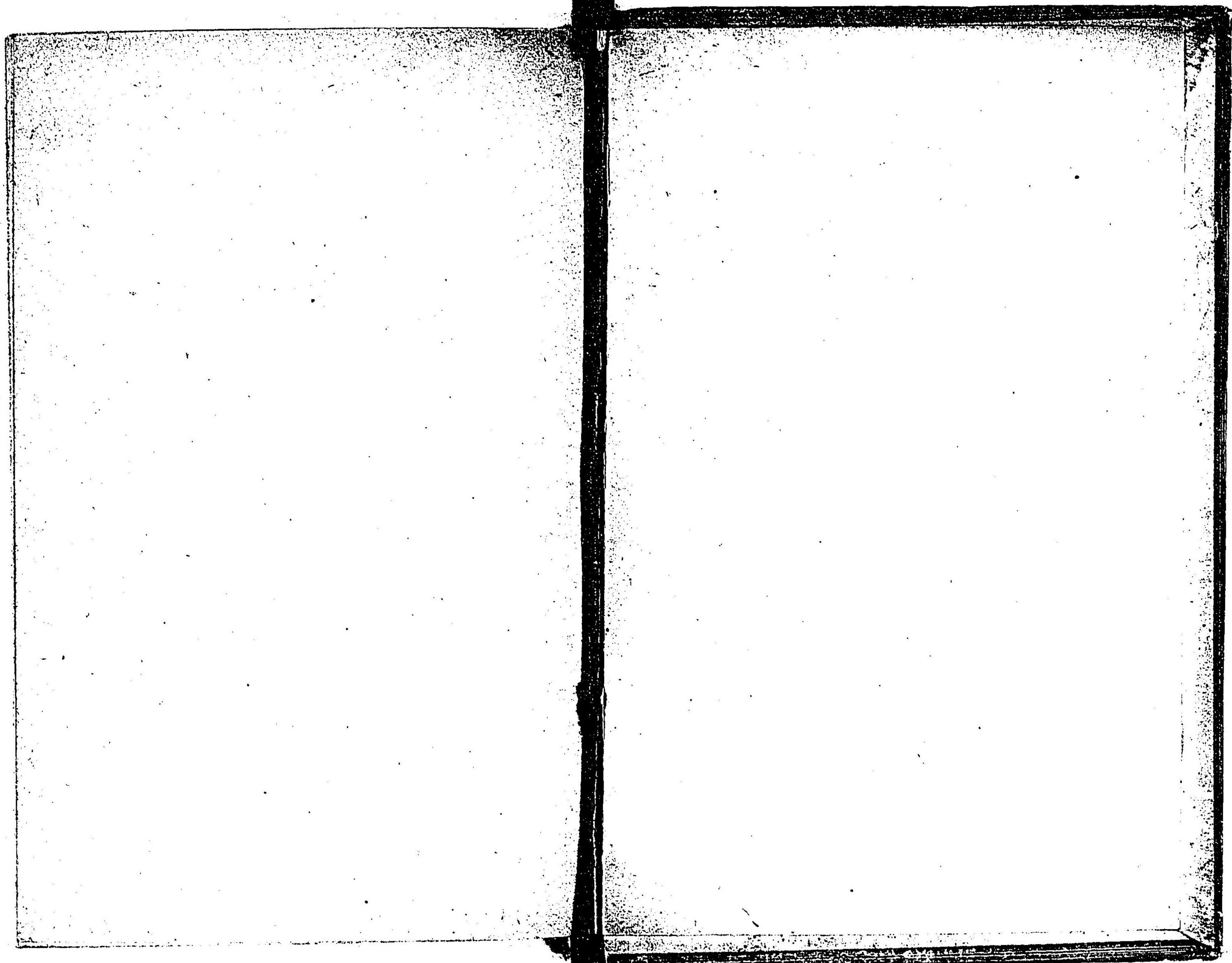
繪本忠臣蔵實録

中村風祥堂

M20

EDV-0068





繪本忠臣藏實錄叙

忠孝ハ人道ノ折リ日月の入り車の両輪危命の双響也此
 片時も缺事不可有誘も忠臣ハ孝子の烈より出ると言り孝心
 より忠義も行水忠臣より孝道も立事歴然たり殊に日本
 國の風俗ハ礼を忠孝而道下り立難き時ハ忠を
 執是更ニ聖賢の教ハ異り然ハ三陳テ聴ざれば去或
 思軍本義ハ命を塵芥の如く輕る倭魂の勇を例多る中
 二赤城義士の誠忠を第一として君誓を撃ち俱に死を潔
 能す実ニ忠英の鑑あり

505240



武林唯七隆重



人石内藏之助長雄

浅野長矩



原元辰



上野介義英

宮原新兵衛



進藤小三郎



小林平八郎



清水一角

繪本忠臣藏實錄

目錄

淺野長矩伊達宗春響應司を蒙る條
 内匠頭吉良の指揮を乞ふ條
 加藤遠江守淺野長矩を訪ふ條
 勅使御到着兩侯宿寺設をなす條
 抑營に於て上野介長矩を弔る條
 淺野長矩上野介營中刃傷の條
 太下馬先へ諸侯陪臣馳集る條
 淺野長矩切腹の條
 鐵炮洲邸引拂の條
 長矩親族遠慮堀川加増を賜ふ條
 蜂岡争ひを承る條
 江戸より急難水國に對る條
 片岡磯具小野寺水國に聚る條
 赤穂城中大評定盟約の條
 寺坂列に加る小野寺忠義を説條
 大石内藏助諸士を説を條
 大石良雄竊に後警を告る條
 内藏助仁心衆を救ふ條

上使赤穂へ到着開城の條
 内藏助播州を去て山科に到る條
 内藏助偽に遊里に耽る條
 大石殿れて天井に樂書する條
 主税父を諫言する條
 義士山科に大石と議論の條
 大石父子關東に立出の條
 垣見の宅に義士竊に集る條
 義士上野介に在宿を知る條
 内藏助瑞泉院大人に謁する條
 義士夜討評定の條
 義士本庄の三ヶ所より立出の條
 義士兩國橋に勢揃の條
 義士面々吉良の家士と戦ふ條
 先頭右衛門七嶋井利右工門を討取條
 堀部弥兵衛金九仇家に到る條
 堀部弥兵衛戰義士吉良に腹切に至る條
 義士仇家に本望を達する條

繪本忠臣藏實錄

○發端

夫忠孝者人倫の主する所文武者男夫の守所謀を好んで衷を致や義を見て勇有や
 倉是忠臣義士の道より聖賢の則取て其志を溝壑に有る者ことハ巨なる
 哉爰に人皇百十三代東山天皇の御宇大樹徳川(源綱吉)の時當て播及赤穂の城主淺
 野内匠頭長矩の長臣大石内藏助藤原長雄を始め同志輩り四十六名忠を盡義を勇で
 主君の讎吉良上野介を報したる事一百八十有餘春秋を歴の今に至ても普く世に讚
 美而其忠心義膽を感ぜり其濫觴尋るは淺野長矩が祖先ハ豊臣秀吉公麾下五位下
 彈正忠源長政にて其孫内匠頭長直正保二年播州五万二千石を領す於是徳川(家光)
 公の釣命に依て赤穂城を築けり長直の嫡宗女正長友寛文中父業を継いで五位下
 叙す延宝三年長友卒し其長子又市家續ぐ時年廿五歳柳營に参候而大樹に拜謁有
 べき爲老臣安井彦右工門を従へ出ひ同朋二人案内にて元老へ達し首尾能謁見相整
 ひ内匠頭長矩と名を乞賜りけり

○淺野長矩伊達宗春響應司を蒙る條

去程は元禄十四年三月勅使柳原前大納言資藤卿高野中納言保春卿院使清閑寺中納言
熙定卿江戸表へ御下向在ける是則ち幕府徳川氏年始の使節を朝廷より酬し給へ
る公の恒例とを依之柳營は金銀を鑄め珠玉を飾り其設け大方なりす傳奏饗應
の有司を定り札勅使は播州赤穂城主朝散大夫浅野内匠頭長矩院使は豫州吉田城
主朝散大夫伊達右京亮宗春高家衆は品川少將兼豊前守伊氏接待たり爰は又吉良
少將兼上野介義英ハ高家の古成バ毎年此儀式ハ出頭して大小となく指揮を爲
す既而兩候へ饗應司を命ぜり長矩宗春謹之を奉り時長矩揖禮して被申ける
ハ某素より不才而公家堂上故実を識らば散て其任は充難く候と申さるるを執
事重て曰く其作法ハ吉良義英ハ問尋ね例年の格式を以て相勤めらるべしと申さる
まぞ長矩宗春兩候ハ嚴命を拜し退出し各館へ皈りし時伊達左京亮ハ半途よ
り駕を枉て吉良館に至りて義英ハ對面而禮盡て作法何角の指揮を依頼し飯館あり
又長矩ハ館は飯て家老安井彦右工門藤井又右工門を呼御用の趣きを傳へ然る可ハ
吉良少將へ賄賂を以て睦べしと申さるるは生得吝嗇成安井藤井の兩人之を執りて
彼の卿も御用の事は候へバ何踈略の候べし滞りなく相濟候上にて御音進有て然る
べく候と賄賂の沙汰及ぶる社洩穢けれを翌日内匠頭ハ吉良第に至りて義英は

對面有て申さるるは昨日傳奏饗應司の命を蒙候得共某元末其器は堪がる事を申上
辭退致候へバ傳奏儀式故実ハ於ハ貴殿能恒例を知召るは因毎事御指揮を以て相勤
むべき由の儀にて候諸事宣敷願入候と申されけり上野介云へかみ臣も同く不案
内ハ候へとも聊か存知の事ハ相談及候べし伊達氏へも申す如く近々御未駕あ
るべしなり尤も勅使へハ毎日進物等有て然るべしとの儀と述を長矩之を承諾して
吉良の第を出て其後執事へ申談しけり土屋相模守の曰以の外の事ハ上野介ハ高
家職掌を以て被申るると毎日の進物ハ宜かり御帶坐間ハ兩三度計其沙汰有
て然るべしと有長矩も其言の如く用意有此夏を上野介泄聞て怒り傳奏行事は於ハ
我指揮の外ハ出ず執事何ぞ此事は預るべけん哉長矩私ハ餘人は尋計ハ事奇怪と
言り怒り意恨の端とを成りけり

○内匠頭吉良は指揮を乞條
爰は伊達左京亮ハ吉良上野介へ菓子扇子箱と稱して音物の品を度々贈れりかハ上
野介大は喜悅て院使到着前ハ我第へ左京亮を呼迎へ儀式作法の次第を書記て傳へ
猶其程々に出て指揮致すべしと懇々演ける亦浅野家は家長安井等が吝嗇にて音
物粗末なれば上野介其札の薄さを怨怒して内心姦計を回しける内匠頭上野介は指

揮を受んと數々吉長第へ訪問すれ共御用は詫げ或ハ他行の由を言て會々偶々對顔
なす時ハ甚だ疎略は應酬して深意を演ず長矩不敬を堪へ居れハ近日勅使御下向
は依て長矩大に心急し吉長第へ駕を飛せし指揮を乞けける上野介取次を以て答
る今日在宿候へとも折節未實候へハ後刻御出可有と申す時を移して飯館あ
り又其日吉長第へ再び被至り取次の侍出主人儀急用有て他出被致其刻申置候
ハ内匠頭殿御出有ハ此旨を演て断り明朝御出可有と申付候と申す長矩も詮方
なく退き明日を待て又吉長方へ至けれハ取次出て一間へ請り須臾御扣候へと待
せける良一刻半もすぎら頃上野介對面而申すハ勅使の御着ハ早明後日は候へハ貴
殿御心急被成べけむ其故実中々容易不成今日傳たり共恐くハ誤り有ん此儀ハ
其前日は御指揮可申其御心得を以て前日毎は御出可有と應るハ内匠頭ハ不快と思
共大切の役を蒙り事成ハ憤懣を押し然ハ御意は任せ前日御指揮は預り可併御
到着早明後日は候へハ其日式希くハ今日義はり度候と被申けれハ上野介答て明後日
ハさせろ子細も候ハ勅使御着の後直る増上寺へ御参詣有此時宿坊にて御膳差上
申さる可酒桶の事ハ定ま力例も無之只料理は随分と念入金銀を厭す被申附べりと
餘所ながし賄賂の催促を爲と雖も長矩平日は自ら金銀を手振る莫無故是と不悟

我を辱しむ雜言と心得憤を押しみてを帰られける

○加藤遠江守茂野長矩を訪ふ條

爰伊豫の城主加藤遠江守泰実ハ茂野内匠頭長矩とハ断金の交なり其頃茂野が第へ
訪問して寒暑の談を演竊に被申けるハ今度傳奏御催けり付て吉長上野介へ屢々御
對談有べし拙者貴殿と莫逆の好有を以て此事申之若隔意有ハ素より朋友の道は非
ず公務は就て利害を論ずるハ忠義を守りて候へハ御覚悟の爲は愚拙の下見を申な
り吉長上野介爲人不敬なると邪智深其職は誇り衆人を輕蔑し動すれハ無礼の挙動
多し拙者去年日光山の御用を奉はり毎度彼人は示談せしが甚だ不遜の多かり
故忿怒は堪兼已に討果さんと覚悟定め候を家臣が計を以て此難を免れ候是を後
考ふる忠義を志す者必らず私りの怨を爲す積すべかり朝の怒り身を亡し
候ハ君子のせざる所なり武士の專一となす所ハ忠孝より大なる者なく候彼の小人
如何程無礼候とも群雄の面前に於て辱お取とも敢て怨を積さるべかり是孔孟
對ひて道を説くは似たれ共朋友の道お失ハトと斯申は候と演りたれハ長矩恭敬面
色は頸に親友の怨志添けなると言はん言を知す豫て鄙生も左社ハ存候然共剛強直
理なるを武と曰と候へハ事ハ臨んでハ屈せざるも又武士の先習は候とを申され

けり長矩天性果敢にして其所爲急速成けり其詞竟ハ符合せる社本意なけれ遠
江守稍暫談話あつて飯館あり後ち淺野家臣片岡源五右工門高房主君長矩が前
出容申けりハ項日吉長殿が不敬有事兼ハ其上君御顔色常不成を見奉り臣寢食
を忘れ候彼人如何程無禮候共小祿の女御相手は被遊候事勿体なく候然と雖も義
を制す力忍給はずバ臣は仰付られ候へ臣當所を立退偽りて浪人成吉長殿は窺寄り討
捨べし君の御爲臣等が如き者十人廿人子替せ給ふべかりすと正敷涙を浮べ諫
けれハ長矩高房が志しを大に感上野介が奸曲免方すべかりすと虽も遠州殿の異
見汝が諫を聞我よく之を會得せり必ず失事有べかりと心を安ト一献を傾けんとて
終夜酒宴を催されけり

○勅使御到着兩候宿寺設をなす條

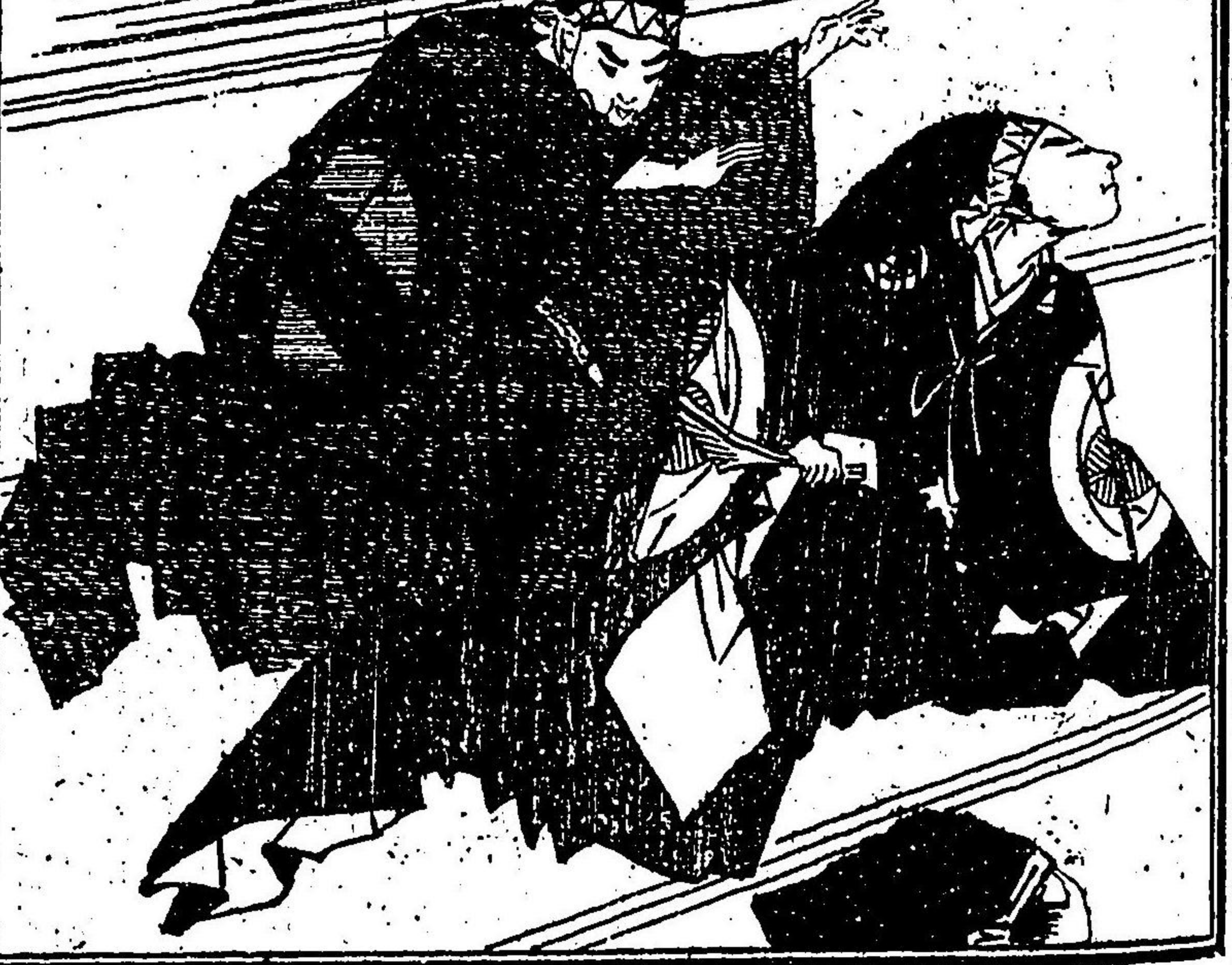
時元禄十四年二月下旬朝廷ハ毎年の御嘉例而柳原前亞相高野黃門清閑寺黃門
の三卿帝畿を出途給ひ同三月十一日江都に被着れ十二日幕府宮中に入御有て大樹
徳川源綱吉公御對顔勅命を拜聞あり禁裡仙洞女院准后より御太刀黄金を大樹へ下
賜ハカ綱吉公謹心御頂戴有て賜物を納め奉つて三卿各拜謁の式を整へり事最
か成儀式まで目出度かりし事ども其後ち台命あつて三卿ハ柳營を退出し給ひ恒

例よつて芝増上寺へ御参詣有ける爰は淺野内匠頭ハ高家吉長少將の指揮に依り
酒掃さまで念も不入而只山海の魚鳥數を盡して蓄へ式正の飾り杯盤の美金銀を以
て鏤め勅使入御を待たれり又伊達左京亮ハ宿坊の設け其外酒掃に至るまで上野介が
指揮従ひ大工泥匠人夫を以て壁を画し柱を彫彩し悉く前日申刻は落成す内匠頭之
を見大に驚き同役儀を蒙り宿寺の設け花美を飾事自己の才覚が吉長が指揮が使者
を以照會すれバ伊達家の答は臣ハ吉長殿の指揮に任せ如此當緒せりと内匠頭之
を聞て忿怒胸は溢れ速く宿寺を改めよと唯だ一夜の間疊二百餘帖を点め壁を塗
て炭火を以て乾し大工日雇數多集て當ませける其日未の刻より取懸り夜丑の刻
に至り酒掃形の如くは調ひける斯て吉長義英ハ淺野家臣設る宿坊に未て酒掃を難
困せんと寺中を見案は相違し美麗結構成ハ是ハ誰が傳し哉と不審苦切たる歟
て客殿に至り献立を以寄披見し大に驚き是ハ何事を悉く魚鳥の料理に今日の御
中飯ハ魚肉を禁し給ふなり速く料理を仕替差上べし如此事ハ再應尋問申さかべ
き余人は相談有しや此如く誤り有勅使追付入御有べし早々用意可有二其上酒
掃も甚だ麁略一と而我意は不叶都て金銀を吝ハ平常之此の度の任ハ某が無調法
は當れりと罵りけり長矩忽ち顔色蒼り上野介が傍に居寄既珍事及バんと

此^{こゝ}時^{とき}早^{はや}水^{みづ}藤^{ふじ}左^{ひだり}工^{こう}門^{かど}上^{のうへ}野^の介^けが
 ま^ま出^い謹^ん申^まん^ん心^{こゝろ}を
 家^{いへ}臣^{おん}等^ら心^{こゝろ}を
 可^べ付^た所^{ところ}夫^{おの}は
 不^あ



及^{およ}段^{だん}全^{ぜん}く^く臣^{おん}が
 無^む調^{てう}法^{ぽう}恐^{おそ}入^{いり}候^{こう}
 之^{これ}何^{なに}分^{ぶん}今^{いま}日^{にち}の
 時^{とき}宜^{よろ}偏^{へん}は^は御^ご執^{しつ}成^{せい}給^{たま}ふ
 べ^べく^くと^と低^ひ頭^{づゑ}平^{へい}身^みし^て演^{えん}
 け^け北^{きた}上^{のうへ}野^の介^け面^{めん}を^を和^わけ^け主^{しゅ}
 人^{ひと}心^{こゝろ}付^つる^る外^{ほか}より^{より}心^{こゝろ}付^つる
 が^が臣^{おん}の^の道^{みち}な^なり^り方^{かた}事^{こと}心^{こゝろ}を^を配^{はい}
 り^り進^{しん}物^{ぶつ}等^ら粗^ろ末^まな^なき^き様^{さま}は^は計^{けい}ふ^ふ
 一^{ひと}某^{かの}が^が言^{こと}内^{うち}匠^{しやう}頭^{づゑ}殿^{どの}の^の心^{こゝろ}は^は障^{しょう}候^{こう}
 互^{たがひ}に^に將^{しょう}軍^{ぐん}家^けを^を重^{おも}す^する^る故^{ゆゑ}な^なり^り必^{かなら}ず
 心^{こゝろ}は^はさ^さへ^へり^りれ^れな^なと^と打^う懲^{ちやう}り^りし^し柔^{まろ}和^わの
 あ^あい^いさ^さつ^つ長^{なが}短^{たん}も^も怒^{いか}り^りを^を止^とめ^め其^{その}日^ひの^の饗^{きやう}應^{おう}無^な滞^{たい}
 く^く相^あす^すみ^みけ^ける



○柳宮は於て上野介長矩を討る條
備も早水藤左工門清亮ハ其夜安井藤井の兩人は面會而増上寺の形勢を諳り今夜中
吉良殿へ賄賂を贈り彼卿の心を省み申さる可偏は賄賂少なきを恕今日の仕宜は
及びいと推察せりと勸れ共安井藤井例の客番にて肯せず夫大成屏事入左様の事
及ぶに全く其許等御不念は依に隨分入念は御用相勤被よと却て早水を叱けり翌十三日ハ
柳宮は於て勅使院使御震應の御能有へいと甲府黄門綱豊卿紀伊黄門綱教郷水戸宰
相綱條卿へ上使被遣御普代列候方ハ土屋相模守釣命被傳震應司浅野伊達の兩侯風
より相請小札四座の猿樂既登城イ本日の御能組ハ高砂田村東北春日龍神祝言を
狂言ハ福神昆布賣ハ公卿を始め幕下貴族御普代諸侯諸有司に至達上下共和まて
中賑敷御馳走佳美を尽さる愛は上野介ハ増上寺より浅野家臣は音物の諭を以て賄
賂を乞共其夜沙汰無心は忍長矩の詰呀に至て向云へるは饗應の品例年ハ事案概て
龜抹候ハ太刀の賓客成下座を尽さる可は以の外の事と嚴敷咎めけるを長矩揮議
而申るハ仰の趣に至極せり乍去執事より佳美を献し給ふ由仰渡され候と答は上野
介面を荒らげ内匠頭殿ハ外境者故札式を知るハ尤も式法ハ高家の職務成は執事
の下知を愛らる社奇異と感て士ハ君め爲はハ一命を捨る事不珍有客の饗應爲は賄を

思ひ疎略は可致哉畢竟殿部者は而執事の旨を幸ひは我身成不敬と割り傍りの屏
風を指し此所は至道金屏風を可用は墨繪を立ハ何事と打叩けハ長矩忽面色変執
事の命令を守は如何候やと早忍へ難き歎は見へ息ハ其座の諸侯手は汗握つて抑
息此時遙彼方より加藤遠江守声を掛内匠頭殿御用有之早々御立可有と被申長矩胸
を摩て座を立れける遠江守ハ長矩を小影は伴ひ箇様成候ハ拙者昨年御用勤ノ候時
幾度も有之は必ず短慮不可有と私語けハ長矩も遠江守が厚志を悦び面を和りけ御
志し忝けなハ此上ハ相慎三候と打笑ひてぞ別れけり
○浅野長矩上野介營中刃傷の條
翌日三月十四日御白書院は於て幕府勅答の式行ハ可とて御執事御老中御側御用
人若年寄高家衆御側衆御普代の諸侯當務の人々ハ浅野長矩伊達宗春高家は吉良
義英品川伊氏各位衣冠正敷整へ威儀を刷ひ嚴重は伺候せり營中綺羅而壯觀たり
爰は内匠頭長矩營中に出と雖も上野介指揮無ハ可勤事も無上野介は面會而次第を
尋んと被伺し呀へ真より出を見其前は立寄て中息ハ昨夜貴第へ参上致せり御用
は依て御他出と有今日の御用如何計ひ候半哉と尋は上野介應答無只今ハ御用繁
成と引返して真殿は入息ハ長矩ハ詮方無忙然と而居たり是時同役伊達左京亮ハ營

何れに方此と方此と馬馳と



事繁く見れば
を長短猶も面目
を失ひ赤面して抑
へしが稍有て諸侯各
々列座して吉長も其席
に着座せり此時内匠頭
後上野介は向ひ今日御用



の條何卒御指揮被下べし
と怒を押し礼を厚く述
れを上野介を荒くけ白服
付て申けるハ昨日も申通
せしを何と聞れりや明日早天出
頭有べき旨を達す斯方大切の御用を
業が一二夜眠らず共勤むべきは朝寐
をして御用を關する不忠人を待て御用
際取申さん哉又忙の御り再々呼掛妨は
を成今も成て指揮請ん杯とハ近頃通
追の挙動も貴殿の発明を以て被勉よ
と罵詈雑言を起して行過がけは斯様
の式法杯ハ田舎漢の勤り可事
非すと云捨松間の廊下へ行を長
能積怒は難く發立て上野介を

呼返し走りて声を掛田舎溝の刀なみの切味試三よやと云より速く刀を抜上野介は切
付かき烏帽子を撃て頭の中り血流上野介大に驚き狼狽遁去んと而俯けは倒を長矩
得たりと走寄疊かけて打んと仕を梶川與三兵衛抑屏長矩は無手と組抱前たり長矩
奮て脱放さんと仕共勇力の梶川成は梶川三付て不動争ふ所へ同朋の関久和馳寄て長
矩が白刀を奪て逃げ長矩上野介を伏前をを憤をり齒を切バリ眼瞋し奮怒面相
は餘ける社理なれ上野介ハ大友遠江守品川豊前守伴ひて介抱す此鬪争の物音は當
中伺候の群候ハ席を起躁ぎける斯て浅野吉長刃傷の由聞ければ即時戸田能登守忠
直は勅使慶應司を命せしれ卒に御間の飾を黒書院へ遷され大樹勅答の式行ハセし
れ三卿へ御引出物有て勅使院使ハ東武を發駕し給へり

○大下馬先へ諸候陪臣馳集る條

備も柳營は即時浅野内匠頭を田村右京大夫武頭へを預りる於是に營中ハ静まら
と雖も大下馬前はハ營中ハ誰共主ハ知ねども鬪争有て双方鬪死すと云又一方ハ恙
がなく一方ハ即死せり共開へければ諸候の群臣ハ亂起走て騒動する事大方不成恰も鬪
の中沸騰るが如く第郎よりハ早馬を以て幕府の安否を聞ひ主君を問んと詰かく
れども御門の警衛嚴重よて知事能ハ人馬の喧喧すく雜沓せり浅野家はハ片岡源

五右工門御門へ立出申渡さるハ浅野内匠頭吉長上野介を刃傷及ぶと雖も双方
死亡に速バチ之は依て兩人共御預けは仰付りて間群候陪臣大下馬前を靜まら
と大音は相演りて爰は漸く諸家の家臣ハ靜れ共浅野吉長の家臣等怍然と而大に患
ひ手の舞ひ足踏野を知れ此の處を聞て其俣早水藤左五門兼野三平の兩人ハ殿中鬪
争の注進の爲慰斗目を着乍し其日の日の刻は大下馬先より早打を以て昼夜の界も
なく播及赤穂へ指して馳上りける

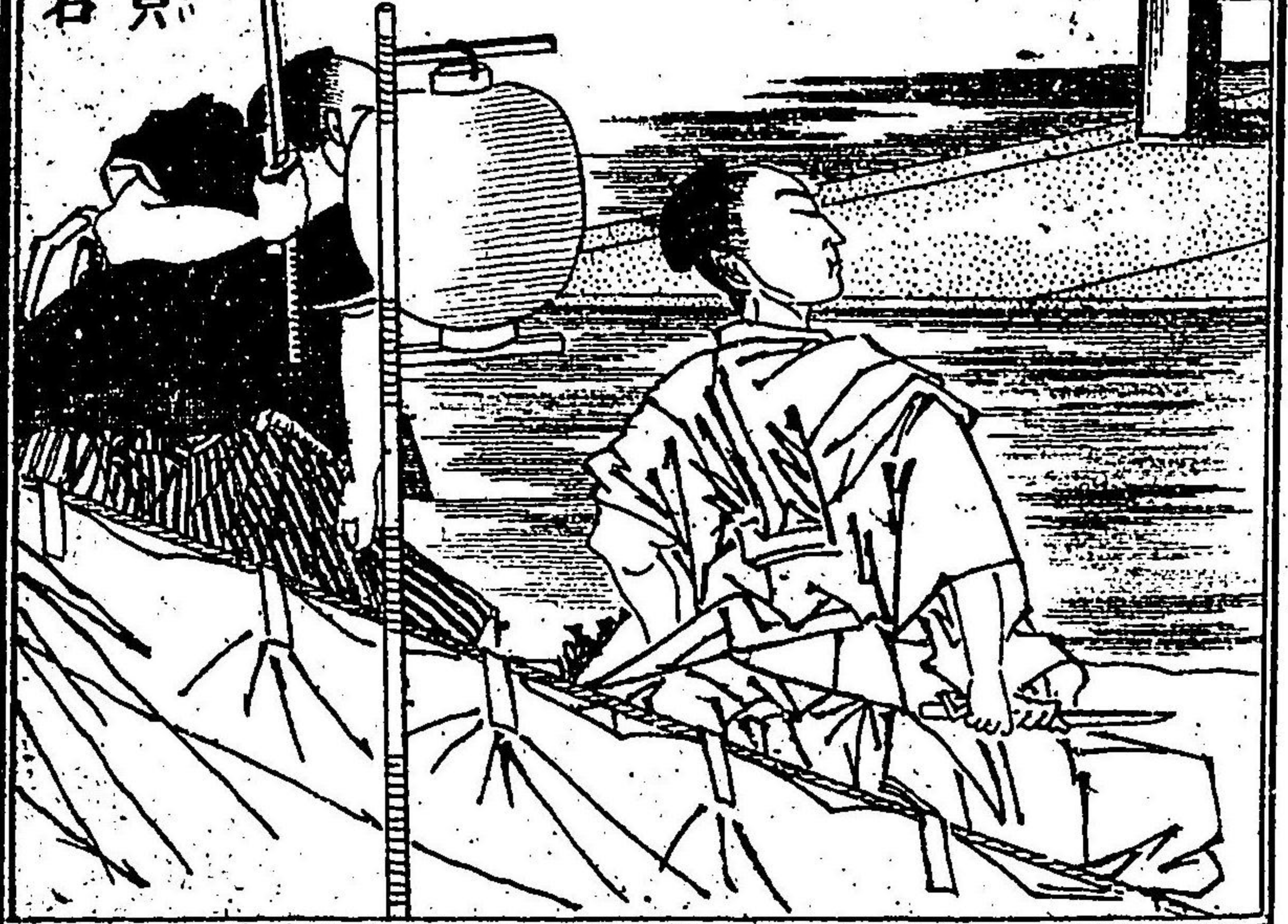
○浅野長矩切腹の條

爰も土屋相模守正直を即日御前召れ浅野内匠頭長矩時節を不憚不敬の罪難遁
まより切腹申付べき旨仰出さる依之大目附庄田下総守御目付多門傳八長久保権
右工門の三名檢使と而田村右京大夫の邸に向ひ内匠頭は對面有て今日浅野内匠頭
儀吉長上野介へ意趣有之由よて殿中を不憚時節を不憚刃傷及候段不届至極は思
召され依之切腹仰付り者こと釣命の旨を演りれば内匠頭謹令掌し備へ候使は
向いて識は運尽し命極り場野を憚りさる段恐入候自刃を給ふ事ハ元未覚悟は候へ
バ異心を存すべし是非上野介を討果さざるを遺憾は存候何卒御芳志は長矩
の佩刀にて切腹を免し給はる所と願ければ檢使其意は任りたり内匠頭切腹の場



野ハ庭上ニ燈を
敷屏風を立たり長

矩此ニ着て切腹の式ニ及び御
徒目附磯田武大夫介錯を勉め
ける嗚呼措へし内匠頭その身
文武の道ニ長じ忠孝を重じ臣
も愛し民を撫で關西の一牧司
たるは唯恨むらくハ短慮して
大勇を能せず一朝私忿の爲め朝儀の大
禮を忘れ自劔し伏て百年の身を害して黄
泉の鬼と成加之らす親戚悲歎の涙ニ沈悖
祿を食むの士皆交衢ニ耻辱を得ん事を憂
ふハ斯く庄田下總守ハ使者を以
て長矩ヲ弟凌野大學へ遺骸請取
べき旨申渡されければ凌野の家
臣相谷勘左工門建部喜六片岡源五左工門磯貝
十郎左工門田中貞四郎中村清右工門以上六名



田村左京ら邸に至り檢使より長矩ら遺骸を請取て鐵炮洲の邸より立取れハ内室初め家士の銘々歎き悲しし度を負失なひて吐ひ泣形勢ハ目もあでらざぬ次第ハ家臣ハ泣々遺骸を指さし哀めて菩提貯ちら芝の泉岳寺へ葬送す家老安井彦右工門藤井又右工門の兩人ハ主君の凶變を聞てより愕然として魂ひ失ひ葬送の供も爲さる社淺猿けれ又原總右工門大石瀨左工門の二名ハ主君切腹の由を木圓赤穂へ注進せんと轡をあけて馳ゆきけり

○鐵炮洲邸引拂の條

爰ハ亦内匠頭切腹の前社執事土屋相模守の邸へ長矩ら從弟戸田采女正叔父淺野美濃守を召寄て鐵炮洲の淺野邸を召上らる間釣命の旨を家臣等より申聞せ躁動うま敗儀無之様且采女正より邸を請取るべしと命せらる兩候命掌而直ち鐵炮洲の邸より淺野大學と列座して家老用人を召出し美濃守謹んで釣命を捧げ讀聞せハ家中の輩ら驚愕して手足の置所も不知途方一昏けるは是非及ハす御請を申上ける中も奥田孫太夫堀部安兵衛等の勇士ハ義を還ふ而君生害の上ハ臣と而存命ベキ謂るし釣命もせよ刀の刃の續らんだけハ切死せんと旨るも堀部彌兵衛金丸とて齡ハ八旬一及ハ江戸留守居を勤る士らハ血氣壯年の者もあさく不劣義ハ於てハ

人ハ遅れざる者成ら是を聽て此事努々然るべららばと諸士を制し理を解て諫め諭しければ各金丸ら言ハ伏し邸を退去せんと一先決せり此時藝州廣島の城主松平安藝守源綱長ハ淺野家の宗家なれば釣命有て内匠頭が家臣今日中ハ邸を退散仕様ハ申渡され非常の奉動を禁じ嚴重ハ警固致すべしと有ハ依綱長執權豊島安左工門寺尾庄左工門騎乘並人足輕百五十人を相添て鐵炮洲へ指向らる淺野邸ハハ在然ハ退去すこと故周章なすも理り之然れと此家ハ豫て武備を好しければ事ハ臨んで取乱さざる法を好む故武具馬具家財雜品迄取纏めて蓆包とし駄荷を造り數百艘の船を聚め荷符一と而一組く一番齋を附け武具家財を運送しければ敢て難人の争論盜奪の患なく其夜戌刻ハ酒掃し了り邸を戸田家へ引渡し家士ハ殘らず妻子を引具し年來住馴し鐵炮洲の地を跡より巴く様々ハ成行けるぞ哀れなり

○長矩親族遠慮堀川加増を賜ふ條

戸田采女正氏定ハ鐵炮洲邸を請取淺野家累代頂戴の領地御失印を使者を以て土屋相模守の許へ十六日ハ返獻あり又此度の長矩の變ハ因て淺野大學ハ木挽町の跡閉門を命ぜられ一族戸田采女正同母堂戸田彈正氏成淺野美濃守長恒同式部少輔長照淺野左兵衛内藤伊藤松平主馬の妻など各謹慎致されける茲ハ又吉良上野介義英方



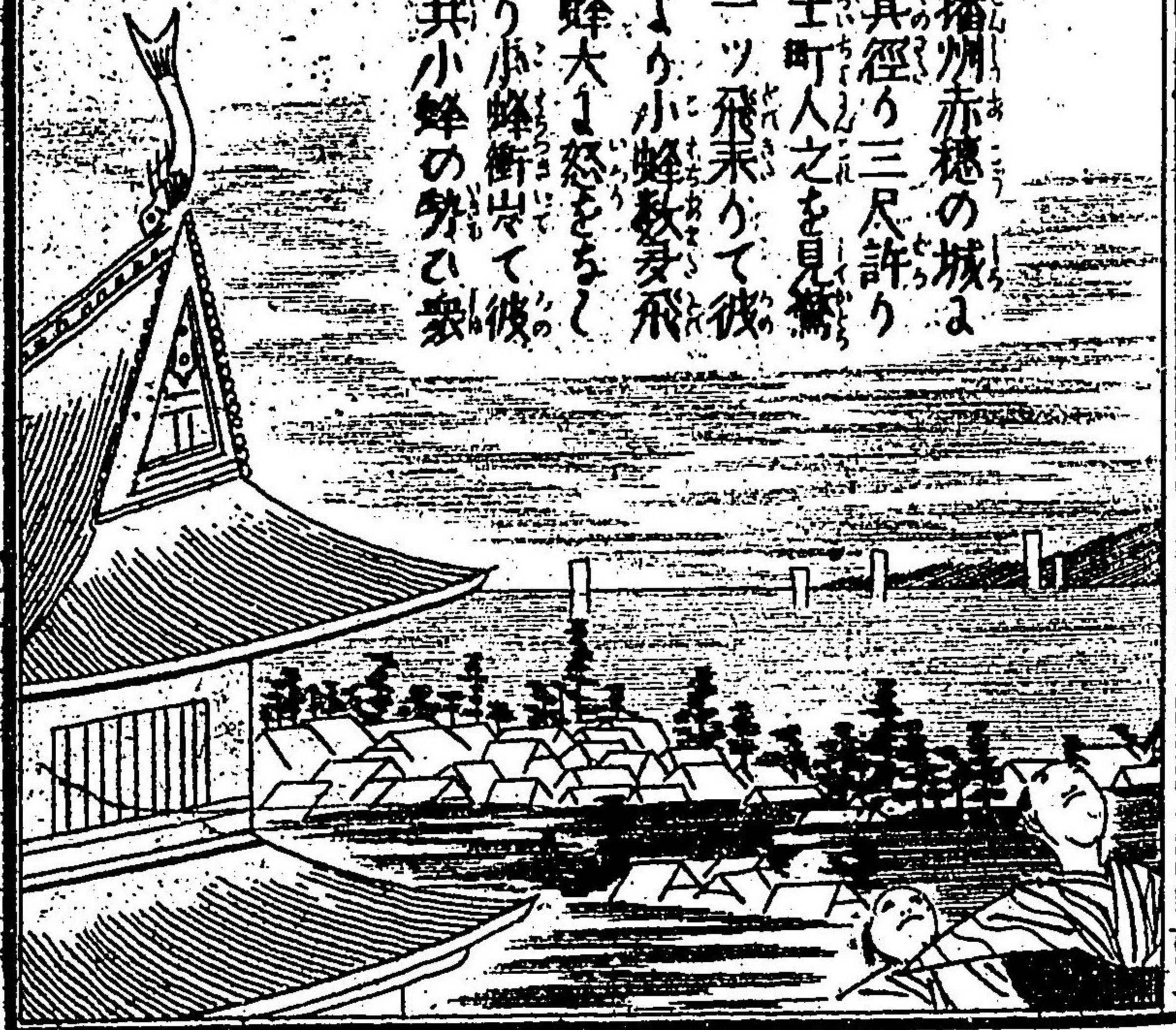
自庵栗奇道有の兩官醫を附屬せられ梶川與三兵衛入の管中關争の砌り働き神妙成として五百石の加

へハ仙石
 伯耆守上使し
 向ハれ手疵療養
 を加へ無遠慮公儀相
 勤むべき吉柳下され吉田

増賜り采邑千二百石と成よける

○蜂鬪争凶變を示す條

元祿十四年春三月中旬の事なりしは播州赤穂の城は
 奇怪の事社有ける城の東の庇の裏に其徑り三尺許り
 成蜂巢忽然として来り城門出入の武士町人之を見驚
 き且怪しげなる所より大さ蟻の如き山蜂一ツ飛来りて彼
 蜂房の遣りを行御せし其時巢の中より小蜂数身飛
 出て彼山蜂を欺き誘ふ賊を見し山蜂大に怒をまき
 て彼小蜂を刺んとす其時追々巢中より小蜂衝出て彼
 山蜂と闘ひ山蜂四方八面より回て争へ共小蜂の外に衆
 大に而竟し山蜂ハ刺殺されて地
 落しり須臾有て空中に迷の如き成
 一塊り彼蜂房の遣りし落来る其音
 紙鷲の風鳴り如く其塊り碎け散
 ると見しち数千の均舞飛散て彼蜂



房をとり圍ふ聲を發す其音宛も迅
雷の如し時集より數千の小蜂

飛出て山蜂を防ぐを
山蜂之を肩す共
せず蜂を以て巢
を刺破り中
入らんとす
る形勢こそ
冷じ山蜂追
かく飛未て
其數一



④争巳の刺より始りて未
の刺は終りたり是を見
人奇異の思を成しけ
り是ぞ大石の仇を
復せし始末此
崩ち有こそ不
思儀なり

①數千

萬と云

ふ事不知

小蜂ハ巢を産し而

飛岩山蜂一雙小

蜂四五双咬附て漸

よして一雙を殺せハ山蜂ハ一

双よ而小蜂四五双を殺し斯の

如くして四方に攻討事三四度

及ひ竟し山蜂小蜂を一も無刺殺凱哥
の如く嗚呼りて空中に飛去り蜂の團

③



○江戸より急驛本國に到る條

去程三月十八日の大刺赤穂城の見廻り足輕周章しく役所馳来り告一江戸表より早打と見て皆城指て馳来り候と訴へる之を聞て大石良雄は直に諸士を引連れ玄關へ登る所へ早水藤左工門第野三平の兩人早打を以て百七十里の道を四日半赤穂の城へ馳着即時申ハ勅使去十一日幕府へ着し給ひ十二日御登城を傳られ十三日ハ御養應の御能有て十四日勅答の御儀式有之所ハ白書院の後松の廊下於て君吉良上野介殿と闘争し及ハれ双方御存命にて主君ハ田村右京大夫殿へ御預けと成給ひ臣等之を聞直様十四日巳の刺ハ江戸も立致し候間其後の事ハ存申さず追々注進可有と色を察じて演説す大石以下の臣等堂を打て驚き躁々互目と目を見合て忙然と而如何成事や起らんと心を空まらして再度の早打を待よける翌十九日の再刺ハ原總右工門大石瀬左工門の兩人轍を上げて馳着けれハ内藏助玄關は出て声を掛去る十四日君闘争有て御預けの旨を早水第野三注進して悉細聴り主君の如何を渡らせ給ふや其後を速く述べれよと云一原總右工門大石瀬左工門ハ詞を揃へ此度君闘争の事未だ其子細ハ知す候へ共察する所上野介殿至極無禮を奉動れ故君よも堪忍成難く及傷及び給ふ所を左右より是を制して伴と成給ひ田村殿へ御預

け時節場所をも憚ららず不敬の罪大ひ成と田村殿の邸に於て暗々と御生害御在鐵炮洲のび所々の御第も早々可引拂との釣命あり我々兩人御遺體を捧むと其修注進の爲馳上り候と息をも次す述べける内藏助重て云く相手吉良殿ハ如何成釣命有しやと尋ぬる兩人答ふる一闘争の初ハ高家より御預けと兼より候得ども其後ハ兼まハり届す君の御生害を一刺も早く告んと心急吉良殿の様子存不申と答一良雄ハ大ひ怒り声を荒らげて加程の事ハ相手の安否も聞届けす鹿忽千万と呵りけれハ兩士ハ黙して座を退きけり於是赤穂城中の諸士ハ兩度の注進を聴て愁傷一方成す老壯齒を切り幼弱魂を地よ落し男女腸が断り涕泣せる形勢誠哀れなることどもなり

○片岡磯具小野寺本國に到る條

諸赤穂城ハ追々到着し京都大坂第一便を馳て凶變を告けれハ京都邸留守居小野寺十内聞之て大い愕き轍を上げて直ち一京發途て播州に到れり又片岡源五左工門磯具十郎左工門の二名ハ内匠頭の寵臣にて少年の時より恩化を蒙る事他臣よりも深く兩士ハ誠忠を盡せり長矩遺骸を泉岳寺に葬むり腹掻切て苦下は任んと思一先本國に趣きて我等一均も朋輩を談ひ本城に於て本意を立んと三月廿日江

府を以て赤穂へ馳せ着闘争
の次第を上野介手紙養生を
加へ遠慮なく勤むべき旨釣
命下り將大學殿ハ閉門御
親族方御遠慮ありて首尾
残る処なく語りけれ各齒
を嚙無念の涙を流しける

○赤穂の諸士城中

一評議の條

爰大石内蔵助ハ淺野
家の諸士三百余人を城
中へ集めて申し此度會
中の闘争委細ハ知され
共主君御生害一及ハ
れ相手上野介殿在命

の由官裁斯の如
く成ハ定て君の
越度たるを以
の事と社覺ゆ
れ然れとも君臣
の義ハ捨難し君憂
則ハ臣辱めらるし君辱
めらる則ハ臣死と云り
況んや君今辱めし死給
へり君未だ嗣子御座さ
し既し君家の麻亡と社
覺へ候今ハ臣等必ず死
を以て道とす可此上ハ
同志人々等と申合せ兼
府より武將命し賞



城請取し向るべき由
武門の先例も有事成
は是を引議城中は自
滅するより他有べら
らす然乍ら御舎弟大
學殿御座事成ハ御家

系断絶せず家臣離散し及ぶる道さへ有ハ此上の幸なる可比儀如何と演らるれハ
群衆の諸臣の中倭粹の義士ハ内蔵助ヲ言を是とし籠城而必死と定め節義を亡ハじ
と同一けれども不義ノ命を惜む者も若や跡目を仰付らるる事もやと夫を頼み假し
同心をすも多かりける爰に内蔵介が同役大野九郎兵工倅郡右工門等の不義士籠城
の事を拒く幕府に對し引引ん事恐れ多し只々愁誼して君の跡目も相待べしと言募
れハ番頭伊藤五右工門外村源左工門岡林空之助玉虫七郎右工門進藤源八等の臆病
者大野と與し評議區々として節議の論を妨げ免る

○赤穂城中大評定盟約の條

斯く城中評議四五度及ぶと雖決定せされハ四月十一日又も大奇合と稱して諸士
を城中へ集會す此時大石内蔵助諸士向て先づ度々會議を爲と雖も何し因て決議
せず爰者於てハ上使待請腹切て城中に死せんと思へり我と一致輩らハ姓名を誓紙
に記し血判を据られよと一つの匣より誓紙を與し内蔵助血判すれば義士の銘々仰
まや及ぶべきと我一ハ姓名を記して血判せり時進藤源四郎誓紙を携へ大野伊藤
の列居所へ進し寄て九郎兵工に向て曰君御在世の時ハ官職の順序を申さハ先貴殿
を重とす然共此血判の儀ハ命を輕し議を重しする所故銘々の志しを顯ハせば前

後を論せず某等既に血判す貴殿の職分にてハ内蔵介殿の其次を他へ譲る可し非さ
るゝ何故猶豫あるや是非兼らんと演ければ九郎兵工眉をひそめ某ハ少々思ふ子細
有故追て血判致すべし此評議今日に限るゝ非もと答ふれハ義士等怒て大野が傍に
詰寄立掛つて声々一欺評議決定なまち又言妨げ衆人の心を迷さるゝ哉返答し因て
了簡有と鰐本くつろげ進し寄ハ大野父子ハ大に恐怖し某等心底別條なし一同に死
ま決せんと思ふなりと云ふ進藤之を聞然し早々血判致されと誓紙を大野に差付
れば某等最前少々思ひ細ありと申せしハ下島の小兒瘡瘡して九死一生なる某ハ人
參を被下と乞を此奇合ハ心急まると失念仕り明友のよゝ急難を救ハ度加之
ならず郡右工門が倅倅大熱發病之にも某與へ度立取つて直来るべしと云ふ義
士等ハ目を睜し汝病に訛け此座を逃去んとす心底別條有疑ひなし此場を立すド
と誓を内蔵助之を制して病の事ハ是非に不及大野氏宅の上小兒を介抱し其上血
判有べしと云を立す不し大野父子ハ退却す進藤又伊藤玉虫等血判を勸れハ
各君の爲に一命を奉るべき否と可申き乍去死す許が忠義と云べりらばと免や角云
伊藤四人の同士胸せ而金の間退くハ小山源五左工門續て金の間至て五人の者
と論破成計果さんと成形勢を見て大石小野寺之を引分る拮据幕府より城没収ある

旨早打を以て報知有ハ不義の輩ら儲り盟約せし者ら我先と城を巡り始め三百人と見つるが残る輩ら僅く百人に過ぎりける

○寺坂列加る小野寺忠義を説條

備中城中ハ誠忠の士彌志を一に而上使請籠城せんと聞くと所へ四士才余りの男大廣間の口平伏して籠城の列し人事を願者有内藏介之を近招き某未貴殿を不知と雖も籠城討死の列し加らんと願るハ是藩中の人紛れなし姓名如何と尋ねハ彼勇頭を少しあげて仰の如く私儀ハ吉田忠左工門の組下の足輕寺坂吉左工門信行と申候先達てより御評議事を風下兼り小身の私候得共其列下御加被下候様隊長へ願候所此度の義ハ御家老大石様へ直御願申上と有之依て歴々の前をも憚らす推参致候何卒御聞届被下候ハ生々世々有難候と餘儀なく申内藏介大感普代の家臣も時臨て遁しと計る高祿も頂戴せぬ其方の斯の心底初々驚入れり高恩を蒙りし者も遁奔せんと社成其方減りんとて大の誹りを受まじ速立退然べしと言を盡して述べられ吉左工門重て申斯仰有んと覚悟致候が忠義の道に於てハ祿の高下を論すべからん君の御恩を請し別隔無之と強て願と雖も内藏助敢て誓紙血判を許されバ吉右工門少恨くする面色にて私し少身者故一大事

の御役立間敷思召ての事成てし各々方ハ上使待殉死仕給ふべし私ハ上使を不待相果んと諸胆脱て既腹切らんと仕を義士の輩之を止め終誓紙誓命記し血をそそぎて列し加りける時小野寺十内諸士對大石殿の所存殉死決定候哉某存候ハ死べき所にて死る時ハ武臣の名も下さじ亡君の耻辱をも雪ぐべし君の志一を續しハ今城中死るを以て忠義も言へりらす爰ハ智謀を用ゆべき所にて候と演る内藏助十内ケ耳は口つけ貴殿の一言臣が心符答せり然ながら今陽一事を説べりらす先今日の會議も是迄ハ大概人の剛臆の程知らんとて誓紙を匣に收め内藏助諸士に向ひて申免するも角仕も忠義の忠成ハ只我指揮に従ひ今日盟約の面々明日當城は於て切腹及べし内藏助於ハ登城して生て再び城を下し各方も其用意を成明日登城可有と述べ下城したる見

○大石内藏助諸士を試む條

明ハ四月十二日大石内藏助長雄ハ黎明登城し柘筆中村勘助命じて着到を記せ殉死一黨の徒ら待し金石の義士親戚ハ長別而登城し姓名を帳面に記て大廣間集る者僅く六十三名に而昨日減す午刻及べしと来者一人ハおはれハ最早人数も是迄と覺へり早々門を閉へしと城門を鎖かける今日登城の面々ハ最末抜群の

者にて生て再び歎じと必死を定し者成ハ徐ニ密義を談すべしと諸士に向ひ申けるハ各今日の登城誠ニ以て忠臣の至言ノ演尽シ難ク爰一臣一の所存を各位ノ談すべしと先一門方よりノ異見と墨付使者の口上を二々ノ演畢リ此度尋用九左工門月岡治右工門兩人を江府ノ遣ヒ愁訴すと雖も御目附先達進発の上成ハ戸田殿の異見ハ聞テ迎ヒの事あり大學殿始め一門の人々皆其見替る莫き然ハ大學殿の手筋速隔ふる非ず一先御一門の異見ニ隨ヒ城を開きて莫き濟シ大學殿の洋流を見合に是内蔵助本心なり死ハ誠ニ難ク非ず而死を處する莫き實ニ難ク假令今度城去共殉死の道の絶る非ず只城を去と不去の二者臣昨日迄死を究め今日言を偽るに似され共爰ノ深き主意あり城を不去して今殉死仕時ハ亡君心を継ぎの者ハ非ず城を抗ると死る莫ハ義ニ於テ深キけれとも忠節の道ノ遠シ是唯臣の武名を墮さしとて一門の難儀君家再興をも願ふるハ游俠の們ら近うして忠義トハ仕難シ内蔵助ハ於てハ忠義両を全ふする術社稷がふなり今嘗へ城を渡シ一時の嘲哂す耻とする如ハ何ぞ節義と云べけんや昨日迄死を盟て今日又生を説是武士道ノ非され共唯謀略を出して忠を全ふし終を成せむと思ひ故より大行細儀を願ふすと云へり昨日迄城中ノ死せんと云者ハ諸士の剛膽を伺ヒ金石の黨を結ハん爲なり果して今日必

死と定るに及んで出頭せざる者少く是を以て諸士の心術定らざる莫を知る臣豫て一門の大義を思夏あり今日登城の面々於てハ心を置キ非ずされ共未ダ頭ノ口外仕難シ一先城を開渡し追テ肺肝を明すべしと忠信義言を以て説より必死の英雄衆ニ相違ハ仕つれ共威信一服して感動し城を渡すの衆議も決定而各下城したるける

○大石良雄竊ニ復讐を告る條

爰ニ奥野將監進藤源四郎原総右工門河村傳兵衛小山源五左工門等下城せずして後止まり内蔵助に向ヒ如何一御一門大學殿へ御爲悪く害ニ成リ候とも亡君遺命無之ヲ城を明渡すこと臣の道を失ふなれば城中殉死ハ差置きて花岳寺の牌前にて我々せりり切腹致し泉下の君ニ仕べしと論破して止す此時内蔵助密ニ云へるハ事ニ臨んで懼れ謀計を好んで成ハ勇士の好ざる処ニ非ずや臣が所存と云ハ城を無事ニ渡シ原史命を全しして上野助を撃て亡君泉下の憤怒りをやすめ其後ち腹切つて死せば栄名死後千載を歴とも不朽べし演ハ奥野始め五人の徒ら某儀ハ臣等も思ざる非され共大義の成難を恐て社黙止候こと各怡悦して感涙を流し誠ニ誠ニ謀り給へり誓々命を存へ誓々抗死死り骨を粉にし身を醜不とする共敵上野介が首を切て

亡君の墓に祭すに止べらざると勇敢していざや城地を渡すべき用意せよとて諸有司にふれ道路橋梁を修し洒掃して上使の下向を相待ける

○内蔵助に心衆を赦ふ條

去程大野父子を不臣の凍采と而伊藤近藤岡玉虫外村の五人の番頭ハ城中再々の評議一言も義重する言語を出さず譬へ汚名とも一向に身命を捨難く何國にも立退てと逃仕度とを申しける処に内蔵助が計ひと而城渡すまき一決せしを拵悦する夏限りちし爰に其頃外國の諸侯紙幣を製而金銀と交換て幕府及び他國交通の費を免せり依て播州赤穂にも楮幣を製せり然るに此度の凶變に彼紙幣忽ち廢紙とならん夏を恐れ領内人民大に思ふ内蔵介之を察し金奉行を呼て府庫の金銀額を計り人民所有の楮幣を買取て衆の心を安んぜん」と札座奉行岡島八十右工門に指揮して是を引換ければ領内の人民万悦而我一と札座に未つて金銀を得て内蔵助が仁心を讃賞して欣悦ける又城属金銀を出て諸士飢寒料と而人数に應じて配分しと計る時大野以下者大義の評議に後込而逃隠れ用金配分と聞て人より先に進出得ん夏を争ひ其法知行高に應而計へしと論じけるを内蔵助之難し曰小臣大臣とて君を思ふに隔ち其上大臣ハ武具家財多急に飢べらざす小臣家財少ふること少なき

バ只人数に應じて配分すべしと云ふ大野の徒ら祿に應せんと暗謀争へども内蔵介は計り適當なれば諸士之に同じ人員割にぞ決定せり之を聞て小臣の者ども悦ぶ夏限りるに大野を憎む日頃培せり

○上使赤穂へ到着開城の條

初も赤穂家臣城中に教會議而城を渡さん夏不忠成と而仁恕の公裁無之に籠城及由風聞有ければ依之山陰南海の諸侯豫め其手當を成封城に警備し或ハ兵船を海上に備へ播州赤石姫路の両候も又人数を差向淡野家一門の使者遣々赤穂に到着して上使近日到着と聞へければ赤穂の城に領内修理洒掃を微細に尽し盟約の黨に内蔵介命じて城門を鎖堅め一々備を定めさせ若夏有ん時の用意を成主殿の勤番嚴重に戒め宛然君主の在が如く之内蔵介一人の方寸を出て威儀整へり既四月十八日上使荒木十左工門榊原采女御代官石原新左工門岡田庄太夫到着有て即刺城中へ案内有ければ内蔵介出迎て面接有て釣命の趣を傳られ内蔵助謹て拝聞し畏入て御請申ける將又明十九日卯刺城地相渡べき旨を拝諾して四人の上使を城中に迎入て禮法嚴重に點檢せしむ上使檢分して總ての洒掃万端行届き諸士の威儀禮議の正敷を感心せり内蔵助謹んで上使に向て申けるハ今度内區頭不調法仕依之御式之通

仰付られ家中の者共畏奉り候然共大学一度御杖免を蒙り御奉公相勤候て弥家中者
共安心仕候様偏は奉願候と演とも上使は何の答もなく而下城せられける斯て其日
の夕刺上使旅館より内蔵助を召荒木十左工門演けるハ今般領内及び城中諸夏万端
清潔酒掃を尽し政法無比類仕方殆ど感入し右趣き今日の飛書委細注進せり
就ハ城中に於ての願の趣き美諾せり其節釣命を捧げ檢分の節成故態と返答は不及
と家臣の身と而安臣なきハ痛覺り今夕の注進其旨執夏へ申達べいと有けれハ
内蔵介并謝而旅館を退きける爰に肥坂淡路守安照釣命に依て士卒を従へ十八日戌
刺赤穂到着有て城追手陣を構使者城中に使し當城在番の台命を兼り肥坂淡路守
差向て侯開城ハ明十九日卯刻を以て上使約せる由を届らる翌朝未明木下肥後守
公定も士卒を引具差向て使者往返軍納れハ城中より門を開き西將士卒を引て嚴重
に列正して入城有内蔵介始め城中の諸士各城を定て立退けり

○内蔵助播谷を去て山科に到る條

斯て赤穂の家臣等漂客と成谷親戚知己の有地へ思々離散成内蔵助ハ領地要所を
果し將赤穂寺院に田園金銀を寄附而亡君修堂と成六月中旬往馴し地立退て進藤の
所縁よりて京山科に移り地所を求めて見聞の爲に厩宅を美々敷建土蔵を造り田園

を構水而梓主税の後年の爲と稱し永安指の要を計り百年の貯へを成又浴北瑞光院
に待院の當任に兼て知己成ハ此処一行に松拍茂つて開靜成地成ハ後餘密談を爲
し是究竟の処と山科に主税に任せ此所に来て拾翠庵に寓居而金石の輩を誘ひ方
丈に於て毎度密談を催ける

○内蔵助偽て遊里に耽る條

爰に吉良上野助ハ大石内蔵助が知謀有夏を聞及りハ此度赤穂の城夏なく幕府へ
差上大石以下の家士速に離散せしを不審し思ひ赤穂浪士が行跡を伺ふべしと諸方
へ問者を遣し殊に京都へハ種々身省し入込夏進藤前原之を聞付内蔵介に告けれ
ハ大石瀕て斯有べしと思へりと答り於て是内蔵助ハ島原祇園町杯の青樓に日々遊
興藝妓舞妓野良を聚て哥を謡せ踊り在り日を暮し夜を明し人目閉り憚らず酩酊て
妓女を伴ひ徘徊し其形勢恰も狂人の如く加之らす島原の柏木太夫に馴睦り日夜樓
に耽り柏木と添伏し亡君の期日ハ却て目立計に狂ハ戯れ遊ひけるを進藤小山
等此奉動を見て参定を成長雄殿ハ我黨の將帥なり頃日の如き行跡有てハ爭て人
の指揮成べけん哉然ながら之偏に徒然の故なるべしとて端光院の江首座と談じ
嬖女を内蔵介に與へるハ花柳の遊興も止むと思ひ令可と素るに京極の辺に二三文字



風一片の花
を吹くあや
すれ秋
の空半
江の
月を

君急掃
袖飯
後

屋某と云者の処女が輕
と云る容源美熊の婦人
あり之を進めて大石の
妾となす内藏介阿輕を
愛し通へとも遊里の遊
興ハ止ざりける
○大石戯れて天井
一書する條
初も内藏介ハ京都所々
の柳陌に浮れ香名を浮
と自ら稱へて伏見の鐘
木町に通り升屋の浮
橋と云娼妓を深く
愛せり浮橋容縁
殊にすぐれ春



③出せる粧ハ内藏助浮橋の

紅顔とすすゞ笹屋
と云る青楼
昼夜の城も
なく遊樂而
酒興に乗じ
或時笹屋
々座敷
天井に筆
をとつて
書見
今日亦逢
遊君過光
陰明日如
何可憐恐

世人久不許逗留不過二夜也
泉書をいける此項吉良が問者も女律も人之内蔵
助の知人となつて始終本勤を窺ふに豫て聞しは相違して放蕩日々に盛んとして酒
に耽つて復讐をなす様子つゆ不ども不見此由問者遂に一上野介を告れば左様有
りてハ一日の血氣を而終り志りの遂がき者なりと大いに安堵し用心次第を怠り

主税父を誅言する條

盟約し復讐黨の其一人たる奥野將監ハ高祿の士にて平日に義を假て文
成の質成の日を送り従ハ臆病心発し盟約を免ふと思所の内蔵助酒色に耽て
復讐を幸ひの事と而我斯る不覚人といふ争り大義を送可い哉と交るを絶け
る爰の内蔵助が嫡子主税良金の生年十五歳にて身幹高く力量衆く賊父の劣ぬ聡明
伶俐の少年成り内蔵助大義を未だ明告す義士等が参會する時ハ他へ洩聞し責を憚
りて入て談する故妻子も是を知事あるは故に涙き計策とハ露知す主税ハ父
を誅言するを憂ひ抗訴し復し詭て諫先ける一時内蔵助美婦の一軸を床に掛て娼
女主税之を見大に怒り寸々引裂しを内蔵助大に憤怒甚く秘藏せる美婦画を何故に
懸けしりと散々罵詈訕ハ主税涙を浮め緒々口惜き御行状や本國離散の後心も乱

給ふが上君の儲を覗りしを聞きたら姉妹は戯れ給ふの形勢ハ御生害の御無念少し
も口惜と思ひすやと泣て父を誅言ハ内蔵助之を感じければ其怒と声を発し夫を己に
習ふ可や父を偽り嘲る言不届至極と姉妹を以て撲ければ主税今ハ力なく父の行跡
を諷刺ハ一問へ入けるを内蔵助は何やら不審く思て小影より伺ハ主税を死以
て父を誅めんと遺言認め知ハ己に腹が突立んと仕る内蔵介馳入て押し汝少年の身
と而ハ今の本動感するに堪へら今社汝は我本心を明さんと復仇の密計を窺し語ハ
主税人ハ依りて斯其不知御帳申上し事勿昧ちと猶も武藝を励み義士の會議に連
ちりける

○義士山科より八石と議論の條

去程は元祿十五年の春江府に於て堀部父子奥田孫大夫等吉良家の形勢豫め知りけ
ハ急此次第内蔵助に通知而東行を催す事屢々難し内蔵介事を急さる様子成ハ義士
而も大に急ぎける爰に武林唯七ハ既ハ空蔵江都に出で堀部と共に肺肝を碎き神奇
興五郎前原伊助等ハ商人と成其他の義士も日雇或ハ乞食杯種々様々身を変仇家
を伺ひしが竊に談するに我々觀りし仇を置て何まで空敷日を過しや斯詮大石殿了
簡延引の事成ハ先京畿へ上り同士勤め内蔵介殿と引離れ歎き黨を結んで返り夏

を果さんと思ふと云ふ。奥田大は悦び某速う山科に至り大石殿に面會而事を決す可と答ふれば然らば某も同行せんと奥田孫大夫不破教右工門兩人二月十八日江府を發途て京師に至り盟約の義士を促す。大は勇い山科に集合而取々評議すと雖も内藏介事を急ぐず各動すれば取急ならん。段某心を得ず兎角三月過す共御詞君存亡見果さば有べりらず自然幕府釣命有て淺野家大學殿へ家督仰付らるる。於てハ仇を復せし事恐あり然らば某一人一黨代り最初りの主意を立申べし。又假令本領へ取する共新に下さるる。於ハ亡君の耻成バ其時ハ各一致而宿意を遂べし。我心此外ハ異心なしと演ハ原総右工門席を進し我退いて思ふ。唯今内藏助殿仰の通様々難渋出来て終ハ此儀成就すまじと思へり。去年より今に至り盟約被復者ハ無論其後ハ加ハる者と虽も御詞君立候上にて内藏介殿の仰の如く御一人惣名代にて本意を以られ其外の者皆腰拔と可成や各位ハ如何にもあれ總右工門に於てハ本國にて死擧をいしればハ更家成べき所存ハ非ず各位如何と席を打て論ずれば諸士一同一言を揃原氏申さる。所至極せり誰り其義理戻らんと同じける。大高源吾潮田又之煎中村勘助云へる。大石殿の言理ハ當侯然共我等思ハ斯寛々と猶豫中敵ハ復有時ハ千悔膽を嚙共敵で我々斯思語る上ハ志を復すべらば只速り事を

果す。利有と云バ吉田忠左工門小野寺十内是。同じ大石の言ハ應ずる跡なく既に二。引分れければ内藏介衆を宥め各位誠忠左程堅きと成ハ一黨にして事を為べし。然共大學殿の浮沈を見ずんば有べりらずと涙を流し制る。諸士漸ハ信服せり。編者曰赤穂家臣本國離散の後艱難辛苦し盟約義士肺肝を碎き復讐の本望を達する迄の美談將不臣災害に逢ふ譚り等數條有と虽も本篇紙數限り有て悉く述難く依て此ハ略して次篇ハ詳記すべし。

○大石父子関東へ出立の條

借も江府に任居る義士の面々屢山科へ飛書を送て内藏助の出府を乞事頼り成ければ九月十九日嫡子主税良金。間瀬久大夫大石瀬左工門弟野和助寺井玄達若黨加瀬村幸七を添山科を發出。人目を忍事成バ前日父子男山八幡宮に詣武運を祈り大西坊に一宿而翌日五條旅亭にて間瀬等と會合旅裝して京を發十月五日江府に着して石町小山屋弥兵工が店を借て主税垣見左内と啓名而寓居せり。又小野寺十内原總右工門大高源吾國島八十右工門貝賀弥左工門間喜兵工等も續て江府へ発足して十月七日の黎明ハ三條旅宿より大石内藏助出途する。相従ふ面々ハ朝田又之煎近松勘六三村治良左工門若徒瀬尾孫左工門室井佐六其外忠間一人を召具し関東へ下

向ちす然るに直に江府へ入責旁々恐有とて相及鎌倉に到て三日滞由す此に江府より堀部安兵工出迎同道を以て廿六日池上本門寺の邊り平間村に富森助右工門が豫て未置ける家より着して暫く此所を居て世上の形勢を伺ひ夜に紛れて石町の主税が隠栖し務任せり

○垣見の宅に義士竊に集る條

斯て内藏助ハ垣見五良兵工と實名左内が叔父近江の士にて後見人と偽りける此処に同士仙石中庵(松野時)原田谷右工門(細細森清助)堀部同居而有ける日々田口一真(結繩)同左内(結繩)和田元真(結繩)松井仁大夫(結繩)山彦兵衛(結繩)三橋淨貞(結繩)郡武八郎(結繩)原三介(結繩)山本長左工門(結繩)高田源之右工門(結繩)松村隆田(結繩)西村清右工門(結繩)内藤十郎左工門(結繩)富田源吾(結繩)吉田勝兵工(結繩)服屋新兵衛(結繩)水屋五郎兵工(結繩)小豆屋善兵工(結繩)其他盟約義士の徒ら實名容をやつし医者儒者或ハ商人と成垣見の家を集り議せしが後見を憚つて仙石中庵和田元真田口一真三橋淨貞の四人身對談して其餘人とは議せざりける爰に十一月朔日内藏助右町の隠栖へ義士の面々を集め毎夜四人宛奴僕雜人と成て薄暮より拂曉迄吉良邸の辺を徘徊して様子を探せるを詭し同七日八日の兩日は新に一味連判の起請又へ血判を

据へさせける

○義士上野介が在宿を知る條

初も吉良上野介ハ去年管中鬪争の後辭職を願ひ高家役御免有て吳服橋の傍を退き水庄下日下移居而徒然の樂に茶道を夏とし醫師沙門町人にて此道に達せし者を招きて娯樂然共此地ハ河辺にて濕氣深く不快らす故に麻生上杉の別業に新宅を造り年内に移徙せんと計れり爰に世間堀部住羽倉齊と云神道者堀部安兵工とハ入堀にて教養り堀部に語る某家主中島五良作ハ小笠原佐渡守の茶道の師山田宗實が門人にて宗實と吉良が茶會に出席して馴親しむと伺心さる云を堀部ハ天の興る處をいと悦び内藏介は告て夏を議り大高原吾ハ茶道を心得されハ吳服屋新兵工と号して十一月十九日山田宗實訪へて門人と成茶道誓古と称して屢彼處へ行音物を送るて交情漸々馴親しむに至て吉良が物教育を承又其の廣狹分野を窺ひ聽て内藏介は通知す十二月三日源吾山田を訪て又六日一参るべしと云ハ宗實八日ハ吉良へ朝茶會に参ると云源吾心中に悦び山田に別れて之を大石に告五日の夜に夜討せんと催す処に六日大樹松平右京大夫の館に御成有る因て茶會延引と成由を原吾中島五良作聞直に内藏介に之を告れ六日の夜討は止しける斯て十四日ハ吉良が茶會

彌有夏を聴取て終つ十四日の夜討と定めり及又横川勘平ハ本庄林町ノ塘部ト同居せしが其傍一人の桑門有て勘平トハ入魂ニ此僧茶夏を好て平日ノ士良ノ弟ト出入す故一横川此家ニ数行て交情あるが十二月十日桑門の家ニ行僧曰我無筆トて此返書認め難く認め被下ト切紙を出す勘平諾して受取見一吉良ガ家今より送る切紙成バ心ノ喜ハ被見る一箇月中旬ハ麻生の新宅へ引越へし本庄餘波の茶會を催すべし何日カハ先約御用捨有べしとの文面ニ勘平應諾の返書認め僧に渡せハ限なく喜悅す折節僧の使奴僕他出して返書延引をすと悔む勘平我僕と成持参てハ如何と問僧喜へ共辞して免さず勘平強て之を勤んと云勘平僕と成て文箱携へ吉良弟ニ至り途迷る休して彼方此方を徘徊して第の中の分野を伺ひ返書を届け心取て内藏介へ告知らせり

○内藏助瑤泉院夫人ノ謁する條

内匠頭長矩の夫人ハ客生君生害の後縁の黒髮を拂ハ瑤泉院ト号し親戚の方ニ御座けるが内藏助御機嫌伺ひの爲とて参り拜謁して申上臣近日本國へ引込候は御暇乞の爲は伺公仕る由申上れハ瑤泉院怡悦し給ハ昔今の御物語尽すして歎きを増給ふよぞ内藏介ハ良涙を流して退出し次問ハ於て付属の人ハ向ひ申上近々草紙の如

き物献上致し候間披見の上後室様へ差上給るべしと申置て飯宅有其後近松勘六を以て赤徳開城後の計算を記する帳簿一金三百兩を添て瑤泉院殿へ贈れり

○義士夜討評定の條

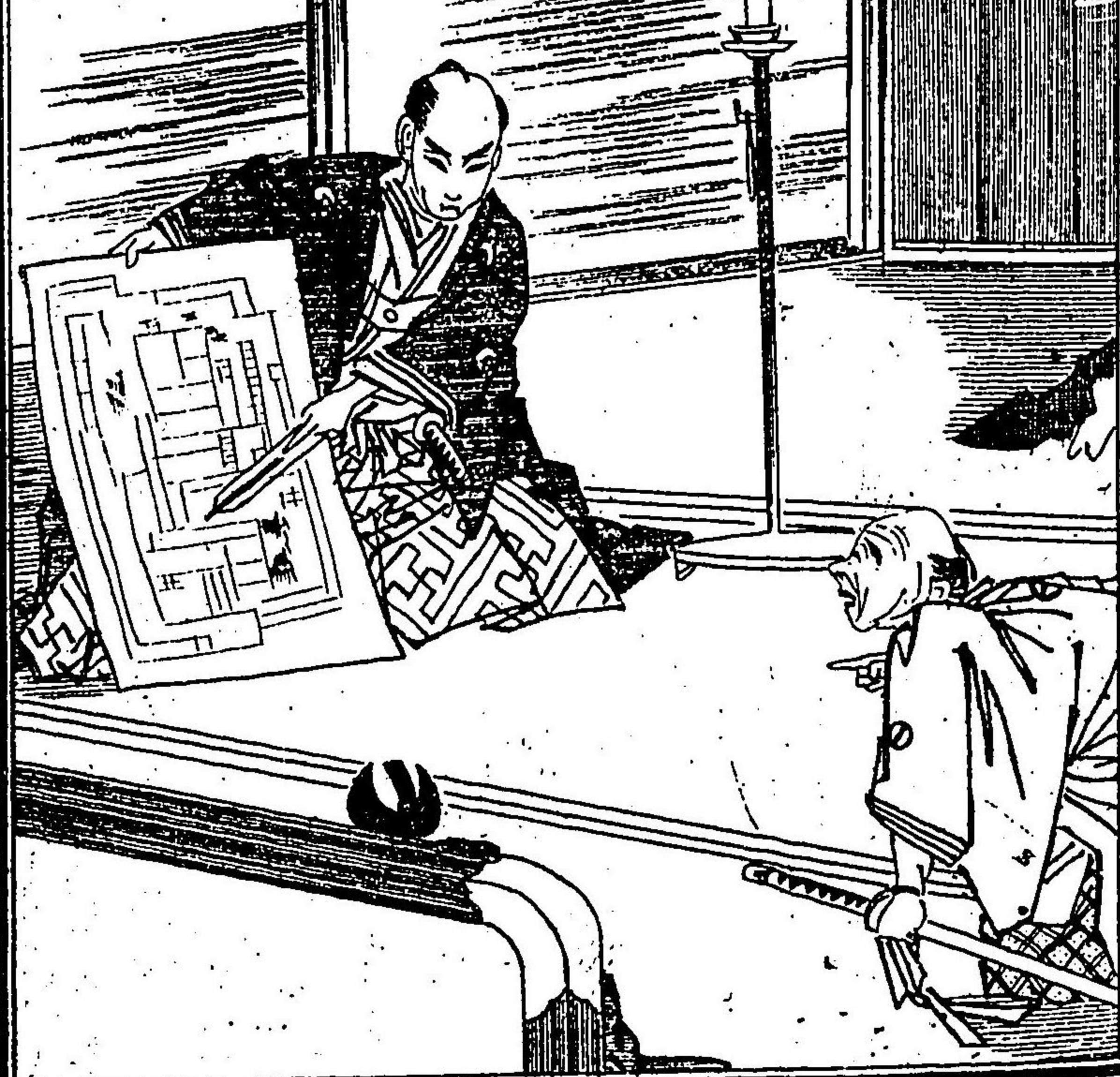
初も元禄十五年の冬ハ雪降夏度々一殊一十三日ハ早大より大雪降積り寒氣烈敷骨ニ徹す十四日ハ亡君薨暮の忌日成バ今春ハ必ず吉良邸ニ夜討せんと定め義士の徒早朝より芝の泉岳寺へ参詣し戒刺し皆々揃しうハ吹毛大居士の神主ニ香を奉り廟前ニ至り拜礼而各客殿ニ入て内藏介住寺ニ申けるハ我々浪人の身まで當地ニ住居生計ニ堪らね候へハ思々他國へ引越相應の營業致さんと存立候今日ハ亡主の忌日ニ當り候故朋輩申合せ参詣致せり各位東西へ分散せし再會も計り難く寛へ候ニ依り暫時餘波を惜し度候間掛合せの齋を賜るべしと白銀三枚を在持し贈り客殿に列座して齋も終りければ茶給り度ハ此方より申入べし必ず御馳走ぶ御無用候左も時刻を移し談話を遂候と断て戸障子を登り閉て夜討の評定を爲しける時義士の面々申けるハ月日社考さ亡君の歳暮の忌日ニ當り其儘を伏せ夏天道自然の冥愚人々の誠忠神明ト通するが故ならん必ず本意を遂げ夏疑ふ可ららず譬へ上野介九天の上ノ動き九地の下ニ匿る共忠義の鋒き利劍を以て首を掌握せんと勇敢

んで
 商議
 なす
 此時
 内蔵
 介懐
 中
 り間新
 六郎
 り手入
 ころ吉良
 の繪図を
 き分野
 きて人数
 掛り隊伍



③の大將ハ誰彼と申す不及主税殿仕且し
 るべし誰ガ御下知をぞむくべきと各一同
 申ければ内蔵介之を聞未熟の粹何と而討入
 の指揮思
 も不奇

分て備へを
 爲る四十七
 士の姓名を
 札に記し分
 間の指揮を合
 度を宛めて首尾
 相救ひ左右を助
 けて臨機應變の奇計を計
 りける先東西の両門あれ
 バ追手搦手と我黨ニツま
 分れ差向ふべし廿四人を
 以て東組と而表門へ我向
 ふべし又廿三人を西組と而吉田
 小野寺両氏諸士へ指揮を給へ
 と云ふ吉田小野寺同音の西組



と辞退すれども各不誑主税を以て面組の竟は大将と定めければ此上ハ辞し難し然らハ吉田小野寺両氏後見をなし給へと定めける内藏助復諸士は向ひ指揮して云るは正兵廿四人ハ直進んで表門を破り玄關の前は攻入り声を発して吉良上野介殿へ浅野内匠頭が奮士共讎を復すと叫び呼りて出合敵と鐘を叩き上野介が居間を心掛て切入べし此時逃る敵を追べからず又奇兵廿三人ハ裏門より突入り所々ハ馳散て声を発味方的人数々百人も有りと敵は疑惑せ勇氣を挫ひしき庭中より有て後諸と成小屋くく起き合せ後ろを遮る者を討取可くの備へと成て逃る敵は心をつけべし初二つの備へと三人づゝ隊伍ハせ八組一隊七組一隊とし引くも馳るも必らず二人相離るべからず勝負は臨んで助合ハ他を顧ること有べからず相詞ハ山谷をつて敵味方を分ちち相印ハいろは四十七字を以て東西は分ち宅の中ハハ蠟燭を照らし自登の如くまして勝負を成せべし左とも火の用心第一に注意けべし合戦の如く敵を破り勝と爲るハ違ひ上野介一人討取を以て勝とするを討入る時刻ハ九ツ半時勝負ハ未明を限るべしと云終つて懐中より呼子の笛を出して諸士は一ツ宛渡し之を面々襟に属け置れ誰よりも上野介を討取らば笛を吹て衆に示されん又羅子を聞時ハ人数一町集むべし此餘は是も度々評定し申合せ候通り各位是を守るべ

したも各心一不適當と有ハ腹藏をく仰せ有べしと云義士のとらぐら一言揃へて御指揮畏り候と答へける

義士本庄の三ヶ所より出立の條

斯て義士の面々ハ泉岳寺より住家立既て黄昏の頃より本庄二ツ目堀部安兵工が宅同所三ツ目杉野十平治が宅同所相生町前原伊助が宅此三ヶ所をもつて裝束場と定めし其夜亥刻まで四十七人の義士一人も闕す三所の宅に集りける社勇々教けれ堀部が宅ハ大石内藏助以下東組の徒々ら集まりて発途の酒宴を催すも弘兵工金丸が妻ハ女をがらも剛として出陣の禮を用いて楊栗昆布を菓子として敵の首を取名を取り給ふ様よとて菜鳥の吸物鴨の庖丁して饗應し酒を勧めり各位喜悅し快ろしく酒く交しける堀部金丸諸士は申我等ハ極老の身にて最寒痛し且宵より心遣ひし殆ど草臥し一睡りし後より出足すべし各位能程酒過され刺限近舟ハ出發つ有べしと云い妻と女め手足を摩らせ高刺きして熟睡る誠剛勇無双の老人あり斯て時刻も子の刺と成れば各々豫て今宵の曠れと用意せし裝束を着して各位暇乞をして堀部が宅を出發つす又面組の黨も此処と等しく両所集り裝束を着し兩國橋へと向ひける爰は深川辺に温純屋久兵工と云者有て間兄弟と

ハ半表る心やすく交情りしが十次郎新六今宵旅装束にて彼処へ行き久兵衛と會いて我等この古明軍と申し合はせ田舎へ引越候。今夜出立つするに定めしれ。當所の名残も今夜限りなれ。明軍どもを待合せ心よく支度致し。存じ奉り。より三十人前計り温飽蕎麦麩の用意給るべし。と金三所出さし酒肴も識のへ有べし。と云いければ久兵衛肯が夫ハ久なる旅立ちより商賣の良なれば何人前なりとも。杜つるべし。と其用意をす。此一面組のともがら追々温飽屋集まり各位酒食くして本庄の装束場へ趣き。此時大高源吾久兵衛をまねき江府名残りの戯むれ何ぞ面白きことハなきやと尋めれば久兵衛され。此程冠附と申すこと々流行り明日の前句ハ何の其と申す冠り。候といふ。源吾聞て是ハ面白し一句附んとて。その岩をも通す索の弓。と書認め万一勝句。成り。ならハ主人の徳。致され。と打笑ひける。しり。

◎義士両国橋一勢揃の條

斯く其夜も更こり積雪の光り白昼の如く大石を始め四十餘人の義士の回々亡君の鏡を載せんと勇しく敢し。で予の中判本庄三ヶ所。の装束場を出発して両国橋集り。其山立の装束ハ内蔵助ハ腹巻仕立の着込黒小袖浮紋の裁附け黒色の羽織標

と袖覆輪。白く大筋。して頭巾の。うらう。境の鉢を。包く。火事装束。一摸。疑し。金皮の袖。標し。ハ故。浅野内匠頭家臣何々と姓名を記せり。其他の義士も着込。紅絹裡の黒小袖。黒羽織大筋有。着し。頭巾の前立の銀の鏡。ハ正兵衛。ハ。其。の。文。字。左。又。書。き。又。奇。兵。衛。の。徒。ら。ハ。右。文。字。記。る。し。各。袖。標。し。を。標。し。性。名。を。書。付。し。り。其。容。を。誠。し。威。有。て。猛。く。見。へ。し。り。切。表。門。へ。進。む。正。兵。衛。の。人。數。ハ。大。石。内。蔵。助。良。雄。を。大。將。と。し。て。原。總。右。工。門。元。辰。間。瀬。久。大。夫。正。明。富。森。助。右。工。門。正。因。武。林。唯。七。隆。重。片。岡。源。五。右。工。門。高。房。堀。部。弥。兵。衛。金。丸。村。松。喜。兵。衛。秀。直。入。道。隆。四。三。村。治。良。左。工。門。包。常。矢。田。五。良。右。工。門。助。武。勝。田。新。左。工。門。武。亮。奥。田。孫。太。夫。董。盛。吉。田。沢。右。工。門。兼。定。岡。島。八。十。右。工。門。常。樹。小。野。寺。幸。右。工。門。秀。富。貝。賀。弥。左。工。門。友。信。矢。頭。右。工。門。七。教。兼。横。川。勘。平。宗。利。速。水。藤。左。工。門。滿。亮。岡。野。金。右。工。門。包。秀。神。野。延。五。郎。則。休。近。松。勘。六。行。重。大。高。源。吾。忠。雄。間。重。次。郎。光。興。以。上。二。十。四。人。一。隊。と。定。め。し。り。又。裡。門。へ。向。ふ。七。組。の。一。隊。ハ。其。將。大。石。主。税。良。金。朝。田。又。之。齋。高。教。不。破。教。右。工。門。正。種。木。村。圖。右。工。門。貞。行。青。田。忠。左。工。門。兼。亮。小。野。寺。重。内。秀。和。間。道。兵。衛。光。延。磯。貝。十。良。左。工。門。正。久。堀。部。安。兵。衛。武。庸。倉。橋。傳。小。武。幸。管。谷。半。之。齋。政。利。大。石。源。左。工。門。信。清。村。松。三。太。夫。高。直。杉。野。十。平。治。次。房。赤。垣。源。藏。重。賢。前。原。伊。助。宗。房。中。村。勘。助。正。辰。

千馬三良兵衛光忠 兼野和助常成 間新六光風以上三十三人寺坂音右工門信行も
一列なり長鎗を切高口より代高提燈を掲げ各指子楯を手に持ち両国橋より二行一列
る内蔵介衆より下知して呼子の笛を吹くとて之を御ませ第一攻入バ之を捉むべしと
示て笛一声吹鳴せバ各位之は足並整へ勢ひ保て追手搦手へ二隊に分て進ける其
猛勢あざむくも大洋運浪の如く如何成堅城鉄門も微塵も成べき勇威をり之全く同盟
の輩ハ忠義ハ金鉄より堅く孝ハ富士山より高きを守り忠孝全の一心より對処
ちれば豈卑劣の輩之之對ふ事を得んや世談ハ良將ハ不得敵卒ハ得易しと実ハ大
石氏の進退撤引に隨ひ四十有余人の義士手足の如く運動き敢若干計腹味方一人
の不覺を不取バ大石氏の差四宣敷を得ると最も之全く義士股力同心せずバ全
勝を得る事を得んや我國ハ義を見て勇まざれば男子有らずと自然備る忠敢義膽
各々一番乗高名を望み先を争ふて打入り以下四十七士吉良邸に討入上野介を討
取て本望を達す條ハ次扇の巻首に説べし

義徒吉良が邸へ押入條

斯て大石内藏助良雄ハ神速に吉良邸の表門より向是を望見し門扉甚だ堅固にして容
易ハ踰難進直宿助右工門を呼寄裏門の要害堅固成バ我差向て直に可乘入足下爲

下墨王税が手を以て可入換と云富然畏り候と走て裏門に至見ハ漸く從表門疎り成
ハ從良雄命を以主税に傳へ搦手の人数を以て表門より向き良雄則二十四人を率而神
速に爲轉化喬門に到大手搦手人数入違て各位列伍不乱其形勢宛然瑠璃無端が如し
此時吉良が守守人此狀を見て声を爲発成を三村治良左工門走懸て番人を練我々此
所於仇を討者之汝声を若発バ可殺と番所の柱に縛付たり其時原総右工門長屋の屋
棟階子掛乗上て屋棟に跨り壁中を望見し十二月十四日の月潔明て如白晝積雪に脛
没し邸中分野一目見渡し原過而踏一家棟因合破爲落是是尋て大高源吾乘入梯
を邸の中へ差下即ち下立裏門開しと爲共錠を固鎖し可開様無れば横川勘平三村治
良左工門岡島八十右工門楯を以扉を烈バ武林唯七発を以て樞木を抜き衆皆一度進
入自内表門を打破ハ東西一度襲入其響雷の如く邸中入ハ狼狽勇怯剛愎命途失
ひ我先と逃逐義士等思仍入人数を排り横川岡島楯を以玄関の戸打破高声より自稱
是ハ故浅野内匠頭長矩が舊臣等吉良殿へ亡主の誓を報せん爲し向し尋常御出
有て首を可被授と口々に呼り宅の四方取圍て殺進其勢ハ如破竹成ハ吉良家士等肝
潰し出合者無更爰仇家の隣第邸ハ吉良野中殿敷唯事非と家士を境界より出而既拵合
とす小野寺重内原総右工門等堀越し姓名を名乗復讐の由を演御隣家ハ御恨申事

候はず火の
 用心万端無
 凶事候乍然
 御隣家故御加
 勢と御座候ハ
 是非不及一
 箭可仕と
 申見ハ忠
 義感家士ハ
 引取鳴を許
 て被居ける
 ◎義士面々吉良が
 家士と戦ふ條



樹も大石内蔵助
 ハ玄關の正面
 向何も進と爲下
 知ハ義士路々可
 猶豫我も吾もど
 突進前處ハ名惜
 義を重ぬする者
 一や有けん枕頭
 の力道取三人
 被連玄關より
 切出を村松
 三大夫高
 直一藩
 鎗と名
 乘忍



地一人を突伏れバ續て大石瀬左工門又一人を殺倒せバ残一人は殺勢ハ悔て逃行を
堀部安兵衛為追跡時一門番有是奈手左工門板合テ打出るを大石王親追討不悉森
を突見バ重創被リ不叶と傍の小屋へ逃入ぬ間瀬久大夫逃見藤左工門神崎五郎の
三人ハ板戸襖を指定雨の如くハ為射けり内藏介ハ為驚令ハ前後二手一合し壯士
を板屋中ハ為進者老人ハ揚中或ハ扉重門要極箇所ハ在て下知被加ハ豫て為令如く
婦女若バ逃避るを不可殺獲ハ矢突隣家ハ射踰莫勿れ若堀部逃者有ハ之を直マ可射
浴と諸士ハ制而為用意行ハ難燭を刺火を照照張付ハ之を刺立度ハ宛然白昼ハ不
成其究竟の壯者を携て上野介ハ居間へ差向ハ大高源吾近松勘ハ間十次郎三人一同
進大高玄開ハ為飾弓の級を悉皆之を斷切奥田孫大夫勝田新左工門矢田五良右工
門書院の方ハ進行進付敵を確立切伏れハ死傷者不知數堀部安兵衛破見十郎左工門
倉橋傳介ハ不省を殺進モ殊ハ堀部奥田の兩人ハ勇猛絶倫者成ハ是ハ向者命を全ハ
為ハるし不破教右工門ハ居物切ハ名得士トて敵を殺事數斯ハハ奥の方ハ吉良
家士新算弥ハ笠原忠太郎杉原兵左工門齊藤重兵工宮仕庄右工門松山三右工門馳来
ハ大石瀬左工門岡野金右工門間瀬孫九郎等之ハ對火柱を散て切結ビ双方秘術を竭
合戦ハ中ハ瀬左工門透を窺ハ笠原ハ鬚先ハ順ハ追一刀ハ切下れハ何ハ以猶

豫ハも笠原即座ハ倒れ死間瀬ハ此時新算と戦ハ上段を段と渡合新算の眉間の從正
中ハ竹割ハ切殺せり斯と見ハ杉原以下四人の者ハ大ハ恐懼て引退くを堀部奥
田ハ退くと杉原齊藤兩人を後發殺切倒せり

○矢頭右衛七鳥井利右工門を討取條

吉良左兵衛佐義周の臣鳥井利左工門ハ身幹六尺有餘ハ而勇剛無双の武士トて三尺
八寸の腰刀を拔持從最前刺戦ハ其身數箇所の創を有共少しも不憚懸向ハを矢頭左
衛七悪しと思ハ鎧を捲て突て掛期を移而戦ハ鳥井ハ老練武士成共少年血氣の矢
頭ハ鎧先失く而鳥井ハ大刀乱る怨を右衛七為得と利左工門ハ高股しハハ突見ハ
鳥井ハ仰向ハ合破と倒ハ矢頭不透刀を板留を刺と立寄処を利左工門ハ乍倒矢頭ハ
足を離排ハ鎧板よて之ハ請鳥井ハ直額二割ハ眼玉飛出死ハけハ斯ハ清水逸角
大須賀治良右工門と名乗潮田又之熱中村勘助と戦ハを虽も兩雄の武勇ハ敵ハ難ク
清水大須賀逃走を潮田中村追詰ハ其所口マて討敵ハ其妻ハ四十余の大男一人三
尺餘の腰刀を板持近松勘六を目標打て懸ハ勘六是ハ切締ビ細々奮迅の猛威を闘争
弓手馬手ハ開合せて火水ハ成て戦ハけるを間十治良大高源吾左右ハ近付て近松
を助ハと為ハ助ハ大刀無用と近松謀ハ一声喚キ飛込て彼男の真額を切付ハ是ハ不

叶と引退くを近松声響追走庭中へ飛下危を過つて泉水の中へ倒り其隙に彼男ハ
辛命を遁て行方不知成りけり初義士の面々ハ吉良義英を討取んと我もくと奥の
方へ進み對者ハ切て捨座敷便房小室を探索する。須藤兼一左工門主君の危急を助
て遁去しめ切て出を武林唯七好敵成と見ゆ。須藤兼一接而切絶危ハ須藤頼る剛猛成
ハ唯七弱ハ有ね共劍法少し乱懸ハ富森助右工門片園源五右工門左右より武林を助
て須藤を討と打て掛堀部安兵衛磯貝十郎左工門倉橋傳介も横より進み堀部武庸声
を懸其奴最前茶を爲悪口憎奴之我賜候へ進二尺九寸の下坂の腰刀を斜め構て不
逃と須藤ハ向與一左工門ハ流石ハ我を重する武士にて一足も引き堀部と闘ふ双方
共ハ劍術の達者成ハ秘術を場し開き合せて交ハ少し時勝負と不見しが堀部伸掛拂
ハ太刀須藤ハ乳下切裂て返太刀にて頂二ハ切捨莞爾笑ハける

○堀部彌兵衛金丸仇家ハ到る條

借庭中ハ大石主税を始木村勝右工門不破教右工門吉田澤右工門小野寺十内同幸右
工門神崎與五郎具賀弥左工門間喜兵衛岡野金右工門横川勘平赤垣源藏村松三大夫
杉野十平次千馬三良兵工間新六速水藤左工門赤野祐助奥田貞右工門等大石内蔵助
吉田忠左工門の指令を受我分と破竹の勢ハ奮て投出する猛氣壯勵而向ふ

絶々ハ危爰堀部彌兵衛金丸ハ其齡八十と云んくとして勇氣有老士成り義徒出立
時覺應危心遣て草臥假寐而既ハ義士面々出発すと雖も金丸睡て覺す從宵堀部宅
に未居る姪の堀部九十郎佐藤城右工門叔父の深為謀入を見速刻限移れり進金丸を
起て左より助て裝束着さしめ金丸鎧追取て試み今宵の勝負ハ長逆鐵鎧七八寸切
捨七八度と早鳴て快然打笑妻子ハ長き別を告二人の姪ハ被助て吉良の表門ハ差向
免々味方の人々ハ皆々撃入て破れ門を堅く鎖より又裏門差向ハ此も同く鎖固て可
討入様更ハ無内ハ数人の喚き叫声聞へ危ハ城右工門片端ハ為掛梯を昇九十郎と
兩人而金丸を漸々小門内より下て城右工門九十郎も後より續て進ける爰ハ又大石無
人翁ハ二男ハ大石三平と五右有良雄ハ先途を見届くと自宵忍て第邸ハ隱居危ハ此
と見ゆり急て弥兵衛ハ前ハ素某誘引申べし進玄閑指て案内す内蔵助是を見付て弥
兵衛金丸ハ對て申見ハ足下の延引心ハ懸念故くと爲相待未だ上野勢殿と覺る敵
ハ逢ず闘戦半ハ足下ハ極老の身成ハ屋中ハ在て壯士を被爲下知べしと迫を乞与
願面ハ佐藤城右工門堀部九十郎大石三平我もく切人んとす良雄大ハ制止して三
士の武勇誰より可耻然るが所存有ハ他人を渾難ハ是我主意の本と爲成ハ速
立去べしと申よぞ三士ハ名残惜氣ハ又堀を踏てそ爲出ける然共三人終夜其四邊を

不去敵塙を踰者や有と東西兩門の間を徘徊し夜の明るを相待ける所存の程を類敷けれ

○堀部弥兵衛勇戦義士吉良が寢所に至る條

闘戦既し從刃刻寅の上刺し至り仇家の武士恩義し死する者十六人剣を振る者不知教義士法令を誣し節制を不遵座作進退節中り四十餘人を以て一身を便如く成しが其黨死する者一人も無淺創者唯三四人誠し前代未嘗有の勝軍之爰堀部弥兵衛金丸ハ前刺より壯士等し為下知て為居しが我も一戦成べしと與を自懸進行し中の間の方より都築原左工門踊出堀部を自懸突掛ハ堀部不透鎧を合せ被衝を竭し戦ふより都築ハ武勇勝し士ハ堀部ハ古老の手垂成ハ勝負更し見ざりしが堀部が鎧先大く而終し都築を突殺せり去程し吉良義英ハ此彼所へ遁走し竟隱処へ身を忍び諭天眼通を為得共やわが此処に於て無氣遣と心を安んじ身を縮めてぞ潛伏義士面々追々切込小間新ハ茶道を捕へ腰刀を胸に押當て汝天命惜ハ義英が居間を索内せよと責けられ茶道ハ震ひく吉良ハ庭所へ誘導義士等使房に入ると為其内より二枚戸を鎖固めより木村岡右工門戸を蹴放て中を見ハ緞子の夜着る三重の薄團敷刀掛ハ腰刀ハ有るが義英ハ見ざれば菅谷半之助大石瀨左工門夜着中へ手を挿入伺ハ

見え温ら成ハ遠くハ行くと納戸敷寄屋待婢部屋の間々迄天井ハ鎧を入椽下ハ半弓を射て探し索れ共其在所知されハ義士等勇猛の心ハ折切ハ密敵を討獲しつる歟口相哉此年月肺用を挫き千辛万苦を竭而今日に至本意を遂ふと思し仇と成天道は捨られ神明にも悪まれ為りと眼を怒し歯を切齒既し一同ハ腹接切んと為形勢成ハ内蔵介声を撒し可有此と思し故誠の勝負ハ節制と為定未し時刺も程有ハ今一度授かるべしと下知されハ皆々是ハ被刺勇猛くくんで進みけり

○義士仇家ハ本望を達する條

爰し吉良上野介義英ハ從寮所審し遁れ出て臺所の庭の側らハ棟梁置くる雜物内屋中へ近待兩筆を具而忍び隠れ息を詰り掖居ける斯処へ武林唯七間十次郎ハ雜物部屋の傍り来て若此中ハ在やとと板戸ハ耳添て窺ふ何歎幽し物音の聞ゆれハ此中社不審と唯七直ハ板戸を破れハ十次郎透さず鎧の鐵鎖を以て納屋中を捜索され共人無方如く猶も武林と共に烈敷鎧以突入時暗中より侍一人踊出間を自懸切て懸を斷得るりと濃合只一突し殺伏る初ころ此中怪しくと武林ハ十文字鎧携へ進み入る連藤小三郎と名乗切て出るを唯七無難殺伏より此時十次郎ハ雜物部屋の屋棟下奉て殺されハ是ハ不堪復一人納屋より外面へ逃走るを京野和助臺所より馳出北

敵有とぞ覺るると
雜物を投出し、搜見
今殺留し者の外
無人れば、彼死骸を外
面へ投出、兩人是を改め見
其齡ハ最老て頭ハ髮
して衣服も被賴成ハ是ぞ



と道筋殺倒す類て武林間の兩人ハ
雜部屋の隅々迄滅尋突ハ殺鬼
中あつと一声叫び見ハ未



上野介からんと相圖の矢を吹鳴せバ大石父子を始め義士の面々馳集まる此時片岡源五右工門礮員十郎左工門彼死體見是社上野介殿無相違と云ふ各位歡悅事際をく殊々武林間の両士雀踊而物狂ふが如し然而唯七某上野介を爲討取バ首を上んご云ふ十治郎聞一番鎗殺しハ其成ハ我社首を上んと云既ハ平論及んと爲内蔵助制して相討と成十治郎ハ留を爲刺又唯七ハ長炬生害の時の青光短刀を渡して義英が首を上んごめ内蔵助勝開の儀式を行ハ宅中の燭燭を消電くよ水を瀧き鉦を鳴して人数を揃へ復讐の始末の口上書を亥時差置裏門の中ハ屯集して列を正し追撃の敵有ハ勝負を決し首級を敵へ渡さんと云支度爲けり

○義士吉良が引取取條

其夜も既ハ明渡り卯の上刻計り成危バ大石内蔵助追撃を爲敵も有されハ率引退か必と爲下知バ四十餘人の義徒の面々各位一人宛姓名を高声ハ名乗て裏門より靜々出る此時堀部安兵工武庸ハ負傷の人々を改め礮員十良左工門正久倉橋傳介武幸の両士ハ後殿を爲ける横川勘平宗利近松勘右行重ハ鉦の惱有と雖も不務勇悍て爲步行足輕寺坂吉右工門ハ各人の後より進けり爰ハ相生町を過る時前原伊助が寓居せし隣家の酒肆重兵衛と云者自身疾起て店の戸口を抜きけるが四十余人の

義士一様の装束を着し手々朱敷の流し弓筋或ハハ鎗短刀等を携へ隊伍正敷進し未るを重兵衛ハ見て大驚き肝を消周章て戸を閉しと爲時神崎與五郎大高原五郎中を脱て酒屋の戸口よ至り挨拶をして我々餘りハ咽喉湯すれハ爲湯湯有ハ與へ給へと云重兵衛震ハ躊躇て御覽の如く只今起立候へバ未ダ電も焚申さバ湯湯ハ無御座候と怒る怖る云を聞源吾重而然ハ酒一盃給しと云重兵衛居酒ハ御法度候と云ハ皆々打笑否と云居酒の御法度の如きを守る余等ハ非ず酒代ハ與ふべしと云鼻紙袋も取出其依重兵衛ハ渡神崎大高義士等を酒屋ハ招き入店ハ有合薦包の四斗桶を提携出鎗の鐵鎗にて鎗を打破茶碗にて汲銘々ハ興へり各位喫して息を継げる時ハ大高硯をきて鼻紙ハ書付見發句ハ 山を裂く方もをれて松の雪 子葉と吟じけれハ衆皆頂羽帳中の勢ハ有と感しける富森助右工門ハ人々の酒を飲を那方這方と餐しけるが某も一句仕るべし沖筆取て 飛込て手よたまたまらぬ敵の形 春帆と吟と見よ谷々典去来面内院よ追手を待んと義士の面々酒肆を出し亭主重兵衛彼鼻紙袋を見よ金子二両を封じて表よ元禄十五年十二月十四日浅野内匠頭家頼大高原吾忠雄討死々飲取拾候方ハ酒代と書付ふり

○義士銘々面内院よ追手

初義士徒らハ酒肆を立出陣向院を指て進。裏門に至れ共未だ扉を開されハ西国橋
の東の詰り集り稍少時追手を待ける時大石内蔵助申免ハ間十治郎武林唯七堀部
安兵衛村松三大夫岡島八十右工門奥田貞右工門六人敵の首を携へ泉岳寺へ船にて
行向ハるべし吉良上杉の追手來事必定されハ我等ハ此処に在て勝負を決從後御寺
へ可至勿論各位途中に於て敵は會共勝負ハ心懸す首を必ず奪れざる様可為と云ハ
各人為心得と西国橋より小舟に打乗六人の義士ハ芝を指て飛ガ如く漕行ける時
佐藤城右工門堀部九十郎大石三平等此に來て義士銘々ハ勝利を賀しり斯て義徒等
泉角田向院に於て吉良上杉の追手を待社可成と謀再度表門へ向扉らを敵共寺僧為
恐怖門を不披ハ稍須臾時を移し免ハ兩家の討手も不未ハ此上ハ泉岳寺へ立越墓前
に首を捧し連四十餘人行列定め神印の白布を以鎗薙刀の刃を包先一番二人進次
ハ白無垢にて包し首級を鎗にて擔ひ其餘人々三隊に列り近松横川ハ重創惱み有ハ
駕よ來て後へは從ハ本所一目的河岸より六間堀に掛木代橋を渡り靈岸嶋を過鉄砲
洲に差掛亡君の舊館に到りて皆々悲歎落涙せり於是て内蔵介吉田忠左工門富森助
右工門の兩士を使と而上書を持せ大目附仙石殿の許へ差遣し然而進し行日比谷
裏町伊達邸の前を過時亭守出て義徒を制止門内は馳入り頃陸奥守邸吏一人出て

為挨拶は各位ハ自何何方へ御通候すと問内蔵介一五一十其實を明白に告れば邸吏
大に感激而左様御褒成ハ何しと制止可申御芳れ有ハ駕を為參べき哉と申免ハ内蔵
助掛禮殿かよ為勞る事ハ候ハサと云打過るは保科邸ふて又亭守制止しかハ内蔵介
前の如く演て經過せり猶本田邸の前を通けれ共咎されハ打過行ける

○吉田富森の西士仙石の邸小到條

吉田忠左工門兼亮富森助右工門正因ハ内蔵助が命に從ハ一封の告状を懷中より而諸
士と別れ大目附仙石伯耆守殿の邸に至て懇懇に為案内奏者某名武右工門立出て西
人の姓名問西士其實を各彼一封を差出御披露給るべしと云某名告状を受取西士を
廣問し伴も吉田富森及刀を衆名に授て伯州殿に拜謁を乞仙石殿頭て廣問へ被出兩
使は對面有吉田富森督首而申免ハ故淺野内匠頭が家頼大石内蔵介以下四十七人昨
夜吉良上野介殿宅へ押入則ち上野君を討取内匠頭が墓に糸侯半海同土相榊芝の泉
岳寺に聚り公裁を裁奉り候尤も其場は於て即時自救仕べき所存ハ候得共死後に至
て若公儀は對奉り所存をも辨さし相果候哉との御批判も如何と申し候も
法の御誅罰は打任奉り候最も同土相榊推参仕候儀恐らく某等を以爲言上奉り候と
演れハ伯州殿遂に被為感告状連石の外一人も洩しハ無之哉と被尋ハ西士謹而仰の

如くは候と答是バ伯州殿事明白成バ我今御城へ出仕し此首を披露及御下知を請
て早速歸へし夫迄兩人此処は須臾相待べしと不取敢支度有て被出ける斯て仙石家
ハ両士を厚く被饗しかバ吉田富森其厚志を欣悦鬼備仙石殿柳目小出仕被致一先
台聞は達し即刻私邸より立歸つて又兩人は向て仇討の始末を具し被相尋兩使畏まつ
て早速問状の首を遂一認め差出仙石殿披見有て義理分明成バ感激せられ從是更
ハ公儀は於て評論有バ追の公裁を待るべし迎重而出仕の体成バ兩士仙石殿は向被
仰付首奉細畏まつて候り最早御尋の由も無之候ハ何卒暫くの間泉岳寺へ罷越亡
主の墓前へ謁申度旨伺ふ仙石殿稍思案有て之を被許ければ兩人暇を告て退き飛
り如く泉岳寺へと急ぎける

○義士等首を墓前へ祭る條

却説開十治郎以下六人の壯士先達て十五日の早天首を捧て泉岳寺に到る寺僧大に
驚愕事の由を問義徒則ち夜討の始終を具し告大石以下諸士も無程末而先君の墓前
へ謁し被申べし夫迄ハ先山門を鎖給る可と云和尚此首を聞届門を為閉六人の勇士
ハ面會して夏の次第を問六人の者申様内藏介某等へ被申付しハ此事上杉家へ相
議の時ハ直様討手を差向らる可依て我々墓前へ到て手向る迄ハ尤も大切の首成

ぞ心を可付申りいしく申候こと答和尚感激少ならず先以て各位飢寒堪難らるべ
けれバ身を暖むるハ粥を為過事ましと粥を並べて粥を炊せ禁戒を犯而酒を取寄
させ庭の彼方道がハ後夜を三四俵宛焚せ後夜来るを今哉く待受り斯処へ大
石三平馳来り後夜無恙而無程此所へ被来べしと報ずれば間以下の壯士大悦し山門
迄出迎へ頼て大石内藏助初め義士の面々弓筋鎗薙刀携へ朱敗成て出来る和尚早速
内藏助出迎ハれ深具義勇を感じ涙を流さる内藏介和尚も向今も上杉の討手難計
く候へハ一刺も早く首を墓前へ祭り度候と謂し因和尚も其意を察し則ち玄利大居
士の墓前へ草を備へ香華を捧げ定を捧げ待者ハ命じて諸士の側へ在て諸用を復せ
しめらる斯る抗柄吉田富森の兩士馳来て仙石殿の命を内藏介ハ告る内藏介遂一ハ
聞取大儀而既ハ人教も前し上ハ幸哉墓前へ謁せし各人口漱き吉良上野介の首を能
洗ハ清め三方ハ取敢墓所へ至り石塔邊の地覆第二段目ハ之を供へて四十余人の義
士墓の圍ハ平伏す其時内藏助懐中より首を出し室逃し柄を墓の上段ハ為向大石
内藏介良雄と名乗焼香而首を以て首のうへハ三度貫退ぞいて祭文を誦す其文ハ
曰く

元禄十五年壬午十二月十五日只今面々名乗申通天石内藏介始御足輕寺坂吉右工



門迄都合四十
七人進死臣等

謹而亡君の尊
靈は告奉る去

年三月十四

日尊君

吉良上

野介殿

を及傷の

御事私共其

子細存奉らず然野

尊君御生害上野介殿

御在命御公裁の上我等共如斯

く企て尊君の御心は非而却て御怨怒

入奉り候へ共我等共尊君の縁を食申し共は

天を不載の儀然止難俱に地を不可踏の文無

恥と不可申候然而書成感泣仕候假耻を抱き相

果候共泉下よ於て可申上詞無之候茲は因御意

趣懸奉べくと存奉り候より此来今日を相待申度

一日三秋の思は御座候四十七人の輩雨は起雪は

踏み一日二日は漸く一食仕申候老衰の者病身の

者教々死を連申候へ共増脚臂を頼の笑を相招き

弥々尊君の御耻辱を相遺可申々と奉存候得共不



得て昨夜半申合上野小殿を御供是迄参上仕候此小殿差ハ尊君昔御秘藏我等共ハ
ト置れ候只今夜献仕候御基の下御尊靈於有之者再び御手を被下御珍價を遂玉ハ
右之趣き四十七人一同申上候

ト讀終ハ皆一同感涙し少時袂を絞ける斯て内藏介申鬼ハ君在世時ハ諸士職分の
高下秩祿の多少有共今斯義を唱るゝ至てハ其儀不可有然ハ同十治郎ハ吉良殿の首
を得為事武運ハ通算君の御心ハ被得ゝる人成ハ其功也最一可為依て一番の焼香
可有ト下知す間驚き再三為辞共衆共ト之を押ハ間も己夏を不得姓名を唱て焼香す
次ハ大石主税を始四十四人の人々一人宛指讓の札を為各々形如く焼香し既ハ終ハ
和尚ハ上野介ハ首を渡而可然寺中ハ於て御計ハ可給ト依頼モ和尚令承而本堂ハ收
め然而義徒を容殿ハ請而粥酒を進む義徒皆々大ハ感懐し酒を喫粥を啜て英氣を養
ふ時ハ内藏助寺坂吉右工門を呼一封の書を渡御室瑤泉院の方ハ遣しける

○不義士等泉岳寺へ到る條

初泉岳寺ハ諸士の響應大方不成依之寺社御奉行へ訴へ為延引ハ和尚此書を内
藏介ハ告て出行ハ他出の間警衛無てハ叶まじと思ハれ同流の禪院東漸寺へ使僧を
遣し事を告て警衛を頼まれしハ東漸寺の僧何と為聽けハ僧侶を語らい五十余人

馳来る柳々泉岳寺ハ関東三檀林の一寺成ハ江湖有合諸國の大衆赤寺禪徒等警衛の
支聞傳へ我檀林の耻辱成と思馳集まる僧六百余人山門を鎖討手末ハ出途と棒鳥口
杯取持て勇猛烈敷闘き鬼是を見内藏介大ハ驚き自身馳出て是を制止我等吉良殿首
を不手向中社討手をも拒候へ今ハ思る者なく銘々公裁を待自教覚悟ハ候ハ我々
ガ故を以僧達の難儀反せ候も嘆ハ敷且ハ公儀へ恐有其上我等死後理取成と喻けれ
バ少ハ鳴も静り鬼時ハ同盟愛約せし浅野家の浪士一兩輩泉岳寺の門前ハ表て言入
鬼ハ我々豫て約諾の如く為馳参所最早諸君討入の後成ハ乍無念立歸候ハト責て
ハ今日亡君の墓前まで諸君と共に切腹仕らんと推参せりと為申故寺僧此由を内藏
介ハ為報ハ良雄速時ハ是ハ答て各人方の御出近頃過分ハ候不取敢御意得度候ハ
共我々平常不心掛儀故昨夜の戦ハして誠ハ腰板の様ハ相成候ハハ無是非御断申進
追返されしハ義徒面々打笑ひける

○大石主税訛言を知る條

爰ハ同日午上刺計りの事成ハ門外卒尔ハ驢出上杉の大勢馳向ハ由を三寺中の疎効
大方不成警衛の僧徒勇立つて開の声を發し討出んとす内藏介此由を聞諸士を呼立
其用意ハ本為鬼ハ主税斯と聞父ハ向ハ申様我察する所敵分事ハ候ハト假令来

共同程の事り候はんといふ内蔵介頭を振香々敵を侮るを家士とす斯迄為仕濟事若
過失有ハ死後耻辱と夫々為下知人々幸僧一砥石を乞て刀劍の切刃を付るる主
税も腰刀も刃を付んと爲堀部安兵衛之を見一度切刃を付て關戰爲損を吹め刃
を付て與ふ主税則ち刀劍を頂き一折振て側ら成集居小僧は如何御坊の堺町
の劇場を見給らん頓て討手参バ真劍の排優して見申さんと云ハ小僧面白事思ハ
衆ハ是を見聞而主税が勇武英氣絶倫成を感と覺然討手竟も末哀も無り見バ諸士
主税が前見を感て安心せり

○瑠泉尼待婢をして諸士を勞はしむ條

内匠頭殿の内君ハ殿生害の後ハ瑠泉院尼と称平常一室は籠取て人見事なく
御座方此日寺坂が知せを聞と等しく被立田自身寺坂は對面夜討の次第具聞給
吉右工門ハ曾て為謁言無レバ後室とい夢も知ず瘵氣色も無く遂一物談を爲し
がバ瑠泉尼斜からず喜悅て諸々勇勳勳き哉先々汝ハ休息可為と被申し其詞尋常
成ねバ寺坂始て御事成事を悟り恐れ謹みて退きける斯て瑠泉尼ハ戸田と云る侍
婢も委細を申合泉岳寺諸士を勞らしめらる戸田則ち令承して泉岳寺に別れバ
内蔵介を始め義士の面々出迎の客殿に請す戸田内蔵に向ハ後室妾を而諸君に謝せ

しめ玉ふ様ハ我躬婦人成と志操ハ俱了白刃を踏く仇を討死を一は爲へく思へ共今
日泉岳寺に赴きて四十余人に向て其礼謝を演る事と世の法は因バ心は任せす
嗚亡君の尊靈恨も黄泉の下に散じ玉ハんと思て妾が喜悅何事之よ及んと宜い
しと演免ハ内蔵介謹て戸田に答けるハ臣等聊々犬馬の勞を施し昔日亡君恩顧の義
報ハ万分之一を償ふ耳は候を辱さくも御使ハ成玉の厚き御詞を蒙り候條一同冥加
に余り感悅に不堪候此旨可然御披露願候ふと懇懇に盡申ける斯て戸田ハ本堂に至
て上野介の首を一見而諸士に別て立候れり

○吉良左兵衛工佐父の首級を講ふ條

備吉良佐兵衛工佐周ハ十五日未明に夜討の赴きを公廳へ訴へ及しハ早々吉良
父子の邸檢分の為御目附阿部式部杉田五左工門其外御徒目附御小入目附都合十二
人吉良宅に馳向れ其跡を巡見死人を相改め執事を而之を記さしめ吉良及び隣家土
屋の口叙義士が遺書と齋し退出あり斯て吉良家ハ葬儀を営むに臨て上野介が死
體首無レハ義周始め親戚家士大に愁て意見屈々成しハ兎角穩便の沙汰は非レバ公
儀へ聞恐有殊に吉良家の耻辱を明白に爲の理り成ハ此上ハ菩提所盤松院へ依頼
しくハ無と即ち其首を申送りハ早速令承而於此に盤松院より五人の使僧を撰

泉岳寺へ遺令傳長氏の首を為所望魁一泉岳寺へ從今朝集合し禪僧共是を握みて容
易渡すしと挑しければ使僧も禪僧の過言を憤怒して既一夏と見鬼所へ和尚歸院而
此味を見大に驚愕早速双方を取静め使の意趣を聞届け左も有此方より返答し及バ
んと使僧を飯直様客殿に至りて内藏介は向拙僧只今飯院致せし処吉良殿の御首を彼
方の菩提所盤松院より所望の爲使僧を差越候ひしが如何執計ひ可申哉と被申見バ
内藏助答けるハ彼御首級ハ最早手向も相湊宿意も相遂し上成ハ兎も角も貴僧
の御心任せ取計ひ可給と有しるハ和尚ハ彼首を大成曲物に入乗物も移して使僧を
押副被送危し盤松院ハ此共不知使僧飯末つて夏六ヶ敷様一申故吉良家士等と打
寄史一評議最中成し何の無故障泉岳寺より送来りしハ大悦而幸受取んと云を
泉岳寺の使僧取て不渡先吉良家より請取書を被差出し左無ハ後証なしと申せしを
最なき事成申是を認めんと爲し殆ど其文言は困鬼ハ數欠久馬在合せ果認めんと
覺

一曲物之内相改無相違境一受取申候爲後念依而如件

元禄十五年十二月十五日

吉良左兵工佐代
數欠久馬

泉岳寺御役僧中

原の如く、而遣し鬼ハ使僧等是を見喚と打笑の首を渡して歸ける

○官使泉岳寺より到る條

日良郎へ檢分馳向ハれし阿部式部杉田五左工門等の人々ハ吉良の宅中を逐一小
檢被爲登城有て謹而書類を台覽し備へらる大樹義徒が遺書を御覽し忝けなくも
何感涙を落させ玉ふり有難けれ御執事稻葉丹後守殿を始め列座の諸侯傳て是を一
覽有て各位純忠高義の所爲と被爲感激一人として言を出す人も無し稍有て御老中
阿部豊後守殿被申見ハ斯の如き美事ハ前世も未だ曾て聞及なく御治世も當て此盛
華有事誠は國家の榮え候と讃嘆被爲しつらば於是諸侯有司の人々も稱讃有て其声
須臾も止す時ハ大目附仙石伯耆守殿登城有吉田忠左工門富森助右工門より申し
る復讐の始末夜討の次第を言上り及ハれしもハ即御執事着座の處へ御目附鈴木
源五右工門水野小左工門の兩人を召され稻葉丹後守殿仰せ渡けるハ淺野内匠頭
僧臣共吉良上野介を至人の敵と申立而十七人昨夜上野介宅へ押入上野介を請取
今朝芝の泉岳寺へ引取罷り在り付當時御詮議の間細川越中守松平隱岐守毛利甲斐
守水野監物の四家へ預らせらる但し細川家へ十七人其餘三家へは各々十人宛可爲

此段四家へハ從此方台命を傳ふ可し各々兩人ハ仙石伯耆守へ示談被爲泉岳寺へ馳
向ハれ四家へ御預けの首を被申渡名簿を以て混雜不爲様と指押と爲請取申さるへ
しと被仰渡御徒目付御小人目付を教人相添られり斯て鈴木水野の兩士ハ謹而仰
せを承まハり退出而兩士談じ見ハ内匠頭が家来吉良氏を討取泉岳寺へ引取し事最
早江戸中ハ無障若くハ上杉家より討手を差向ハるも計難し然も我々彼寺に至て台命
を傳未と囚人を四家へ不爲引取内ハ從上杉大勢表て攻討事有ハ一應ハ道理を以て
申静む可免共其上理不盡ハ闘戦ハ及事有ハ四十余人と共ハ彼寺を守り防ぎ戦ハハ
の外不可有と云見處ハ重而御老中より兩人を召れ各々泉岳寺へ被参ハ不可及御徒
目附を以て四十余人の者共を仙石伯耆守の宅へ召寄各列座して可被申渡と仰せ付
らる即ち御徒目附石川弥一右工門市野新八郎松永小八郎の三士を被差向其目未の
刺ハ向として三士泉岳寺へ到着有ハ義徒各人禮義正敷平伏す三士義徒ハ向ハ御曹
仙石伯耆守宅へ表會すべし彼所ハ於て台命の可傳事有と申渡さる皆々謹で令承せ
り三士重内藏介へ被申ハ我等既ハ口達濟し上ハ何も無隔意得与休息被致し上
老人又半負者ハ駕ハ勝手次第ハ被申付べし路次程警固萬端手當の人救ハ有之ハ諸
事無心置申談じらる可と懇切ハ被申しガハ義徒之を聞感涙を流而欣喜ける

○義徒仙石氏の傳は到る條

元祿十五年十二月十五日の酉の刻御徒目附の三士泉岳寺を先達ハ彼立出れハ次ハ
堀部安兵衛武庸家より前んて行神崎與五郎則休速水藤左工門滿亮弓を照扶んで左右
ハ列し大石内藏介良雄同主税良金を先立て堀部ハ懸弓杖計り引下つて行其後
ハ皆々二行ハ列り歩行堀部弥兵工金九村松喜兵工入道隆圓間喜兵工光延の三名
ハ老長成ハ乘輿を列中近松勘六行重横川勘平宗利の二名ハ重騰の惱有ハ駕ハ乘
ける和尚寺僧ハ面々山門迄送出義徒の影見ぬ迄行て別を惜と衣の袖を絞りける
皆御徒目附の三士ハ芝筋の所々ハ馳故イ待ひ躰の者武書を携へし者等を制し第亭
の亭守ハ往來を制止させ見物の者ハ警めらる公儀嚴重の爲躰成バさても繁花の東
都巷街火時ハ芝筋の行人絶て物靜成ける

○義徒四家の諸侯へ配置せらる條

斯ハ四家の諸侯へハ御執事稲葉殿より各位使者召し泉岳寺へ被差向所ハ又仙
石伯耆守宅に於て囚人を請取被申へち由御目付中より被爲達ハ四家の使者又受者
下仙石邸ハ差向ふ此度の囚人斯の如き先例ハ曾て無之事成ハ四家の諸侯各々武を
内まし文を外ハ而専ら心を用ひられり先細川越中守綱利の使者龜田軍兵衛三

宅藤左工門騎士歩卒二百人諸從者三百余人其衆合して五百人計り又松平隠岐守定
直の使者奥平治郎左工門佃九兵衛其衆三百人計り又毛利甲斐守綱元の使者田代要人
原田將監其衆二百人衛水野監物の使者八山田代右工門山内九郎右工門其衆二百人
四家の人衆を合せて千二百人計り仙石陣へ向差ふ去程は義徒の面々八十五日戌の刻
に仙石殿の陣に至り弓箭鎗薙刀等を皆門外に捨捨て案内するに御小人目付起出
て其を御 人々の門の樞戸より内へ通せり此時義徒銘々頭巾を脱いで内へ入去關前
にて刃の及び懐中物を御小人目付に渡せば御徒目付出て名簿に姓名を記而て一人
宛其院に誘引父子兄弟叔姪を尋ねて座を分て四ツに定められたり時大目付仙石
伯耆守殿御目付鈴木源五左工門水野小左工門立出らん仙石殿台命を捧げて故淺
野内匠頭ヶ家頼四十七人の者一件御詮議の間四箇所へ御預け被成の吉申渡らんし
かハ内蔵助右左に礼を爲て拜請す四十餘人の士ハ唯平伏而謹し居り此時鈴木
被申免ハ上野介へ仇を爲後之士ハ四十六人候哉と被尋ぬハ内蔵助謹んで内匠頭
家頼亡君の志掃を懸候はん者四十六人耳にてハ御座有問敷候へ共東西遠國に分敷
仕り罷在候て昨夜迄は出府仕候者四十六人耳に御候座と答ふ三ハ内蔵介辨台流る如く詳ひ
水野の両士内蔵介に向ひ夜討の終始を述一尋問うらんハ内蔵介辨台流る如く詳ひ

いか言上し吉田忠左工門も又之を助け梓答せり猶有て水野小左工門列座の中
を頼田大石主税ハ何れ在哉と尋ぐる主税火い座を進んて是に懸有様と答ふ小左工
門熱々見て年齢を尋ぐる主税十五歳候と答ふ水野云声ハ少年耳聞ゆれ共大の男
とて究竟の器量なり斯の如くも無てハ事ハ是程の大儀に預り候へ共哉と尋らん
しに仙石殿始め列座の人々皆主税り杖書も絶倫成を感心せらる鈴木源五左工
門も誠は内匠頭ハ其身文武の道長と関西の藩屏として普通は超ふる武士を多く扶
助爲候へハ何れ御用にも過失無る可く家運拙し而威亡被爲丸事嘆しく候と被申
しかハ満座各々感慨の聲火時ハ止まり先斯而四家の使者を書院に被召出囚人を被
相渡義徒夫々の使者と共に退座なす時内蔵介主税に向ひ我が細川殿へ奉ハ汝を見
事今を限と思ハ豫々教訓しふる儀を必ず忘却仕なと云ハ主税平伏而御庭訓の赴き
殿肝銘候御心を安んじし小疾々御退出候べしと神妙に申免父子の別礼礼善正敷
を見人皆感涙を流さるハ無りける

○四侯の使者義徒を呼ぶ誘ふ條

借四家の歩卒ハ從者を從へ一手限る去關の前へ至り鶴を並べ義士の面々を衆御
侍に呼ぶ及刀を請取之を足輕に持し鶴を關の左右に從ハしり教士人にて駕一從

神國子總而因人駕の事諸家共
 以推列に非ざる事斯の
 然而列を
 引取ける形
 勢の實勇を敷す
 思へける又細川

預りの十七人ハ大石内蔵
 介吉田忠左工門原總左工
 門片岡源五左工門問源
 丸大夫小野寺重内問
 善兵工流松勘六



連水藤左工門赤備
 源藏矢田五郎左工
 門大石瀬左工門磯
 貝十郎左工門堀
 部弥兵衛留森
 助左工門湖
 田又之丞與
 田孫大
 夫之松
 平家



石主殿
 師安兵工中村
 勘助首谷半之丞不
 破藤左工門千馬三
 郎兵工木村剛右工門
 岡野金右工門貞賀弥

左工門大高源善(毛利家)預りの十八人八野島八十右工門吉田澤右工門武林唯七合
橋傳助村松喜兵衛十平治廣田新左工門前原伊助間新六小野寺幸右工門二水野
家へ預りの九人八野十治郎興田貞右工門國瀬孫九郎矢頭右工門七茅野和助神崎與
五郎村松三大夫横川劫平三村治郎右工門也

○義徒四侯と議する儀

斯而四家の使者は各々義士を伴ひ主家へ陳り義士等も黒小袖を一様と與ふ義士各々其衣服を着更しければ四家共主人出令りて義士を見へ玉へり細川細利殿ハ十七人を願回て今般ハ何も大義成事也此程主君の爲る心を被踏たる志誠感心せりと挨拶有て其風情爲難之餘り姓名を聞恩志詞教々成ハ義徒滿懷而感涙を催せり又松平定直殿ハ聊か所勞有と雖も早速義士を諸見有て待望の始終を尋問り忠義の正操を被爲感對話次々而主税に向ひ其方精志學の勵成は一かり將たる事感涙せり母兄弟も有哉と尋ふれハ主税申す母ハ幼穉の弟と共に但馬國豊岡に罷有候と云詠い涙を浮べけれハ定直殿再度詞を出すふ忍ぶ其座を起て入玉ふ共餘毛利水野の二侯も是と等しく普懇情を竭りぬ四家共珍膳を以て饗應れ火爐も炭火をうす成屍風を以寒風を拂り衣具も製水與へする殊に細川殿ハ内蔵介を愛玉ひ貴客の

如く會狀十七人の佩刀皆損し爲して工人を召て之の師を更させりぬり

○義士の面々四家と於死を賜ふ條

切も其後營中於て評定教々有て竟も義徒も死賜ふ事ハ決定し元禄十六年癸未の春二月四日午の刻大目付仙石伯耆守御目付長田喜左工門の兩士を以て官使と被爲四箇の侯家へ鈎命の旨を令せらる各位命を奉つり義士も傳て其用意有既に其日未の下刻及び實檢の官使四箇侯家へ差向らる先細川への檢使ハ御目付荒木十右工門御使番久永内記の兩士も御徒目付七人御小人目付六人出頭せらる細川家ハ庭上は假家を構地上は疊を敷て其上は白布の蒲團を敷白布幕を張て警固の武士伺候せり斯て義徒各位白の小袖淺黄上下を着し一人宛精々出イ檢使も損礼し蒲團の上は各々座せハ相者も三方も真剣を載て持出十七人の義士の前も之を置相者ハ側へ退りて扣居る此時義士の面々真剣を手取て載し死へ相者各々側へ立寄介錯せり然前内蔵介の首ハ檢使實檢の礼法を行ハ孰其餘ハ首の鬘を一覽被爲耳も一兩檢使ハ座を起小たり初死屍を収るも一重張の屍風を展て蒲團も屍を包みて棺中も収め各姓名を記したる小旗を身置り立置たり松平毛利水野の三家も斯の如く一重相者四家共二夜も入て各々棺を長岳寺へ葬送せらるも高張提燈を照して二行行列

崎士歩卒教多前後を行て警衛なす形勢ハ寂々と而哀傷を權はす嗚呼鬼神もどうぞ

大石内藏介良雄生年二十 吉田忠左衛門兼亮生年六十 原惣右工門元辰生年五十 片岡源五右工門高

房生年三十 間瀬九大夫正明生年六十 小野寺重内秀和生年六十 間丹兵衛光延生年六十 磯貝十郎左工門

正久生年二十 堀部弥兵工金丸生年八十 近松勘六行重生年三十 富森助右工門正因生年三十 湖田文之丞

高教生年三十 速水藤左工門満亮生年四十 赤恒源藏重賢生年三十 奥田孫太夫董盛生年五十 矢田五郎右

工門助武生年五十 大石源左工門信清生年二十 以上十七人細川家まて生害

大石主税良金生年六十 堀部守兵衛武庸生年三十 中村勘助正辰生年八十 菅谷半之丞政利生年四十 木村

岡右工門貞行生年四十 千馬三郎兵衛光忠生年五十 岡野金右工門包秀生年三十 貝賀弥左工門友信

大高源吾忠雄生年三十 不破教右工門正種生年三十 以上十人松平家まて生害

岡嶋八十右工門常樹生年三十 吉田澤右工門兼定生年二十 武林唯七隆重生年三十 倉橋傳介武幸生年三十

村松喜兵衛秀直生年三十 杉野十治次房生年三十 藤田新左工門武亮生年三十 前原伊介宗房生年四十

小野寺幸右工門秀富生年三十 間新六光風生年三十 以上十人毛利家まて生害

間十治郎光興生年三十 奥田貞右工門行高生年三十 矢頭右工門七教兼生年七十 村松三大夫高直生年二十

間瀬孫九郎正辰生年三十 兼野和助常成生年三十 横川勘平宗利生年三十 神崎與五郎則休生年三十

村治郎左工門包常生年三十 以上九人水の家まて生害せり

初又四候より泉山寺へ香儀を施し冥福を被為修し細川氏より黄金五十両又松平氏

より白金五十枚毛利氏ハ白銀二十枚水野氏ハ白銀二十枚を被贈たり斯イ岳泉寺の

和尚三百人の僧を聚めて法蓮を開か小四十六人又法号を授けて三箇位碑と俗名を

共記し山門の左の方山麓を開き之に墳墓築かる然るも四家の侯家より石塔を建

立し玉ひ故浅野内匠頭長矩の家を隣りて一廓の碑石成就す其遺跡後世も著ろし餘

列凛々として一天の明を照し糸詰の貴賤感涙を衣又潤はし稱讚の声ハ街に充り

明治廿九年八月三日出版御届
全 年八月廿日刺 成

定價金八十錢

編輯 廉
出版 人

京都平民

中村朝吉

吉

上京區第三十組九屋町二十三番戶

京都平民

賣捌所

中村風祥堂

風月庄无衛門

田中六右衛門

片野東四郎

都

瀧本伊三郎

川瀨代助

山田駿々堂

岡本仙七郎

東雲堂

佐々木慶助

赤志忠七郎

小沢吉三郎

須磨勘兵衛

積善館

梶田勘三郎

林明進堂

駿々善堂

三輪久次郎

藤井淺治郎

競争屋

大津春陽堂

中山改進堂

東京屋

東京屋

京

大

大津

都

阪

屋

